

大手前遺跡・金剛寺遺跡

—近江八幡市野田町所在—

1989.12

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

大手前遺跡・金剛寺遺跡

—近江八幡市野田町所在—

1989. 12

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生き甲斐のある生活を築くための一つとして、文化環境づくりに取りくんでいます。特に文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と活用に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、昭和63年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を昭和63年度から平成元年度に整理調査を実施し取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財の御理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成元年12月

滋賀県教育委員会
教育長 西池 季節

例　　言

1. 本書は昭和63年度県営ほ場整備事業に伴う近江八幡市大手前遺跡・金剛寺遺跡の発掘調査報告書であり、昭和63年度に発掘調査し、平成元年度に整理したものである。
2. 本調査は県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、近江八幡市教育委員会・八日市県事務所土地改良第二課の諸機関および地元の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

昭和63年度

平成元年度

滋賀県教育委員会

滋賀県教育委員会

文化財保護課長　　堀出亀与嗣

文化財保護課長　　伊香 照男

〃　課長補佐　　小川 啓雄

〃　課長補佐　　小川 啓雄

埋蔵文化財係長　　林 博通

埋蔵文化財係長　　近藤 滋

〃　主任技師　　木戸 雅寿

〃　主任技師　　田路 正幸

管理係主任主事　　山出 隆

管理係主任主事　　山出 隆

財団法人滋賀県文化財保護協会

財団法人滋賀県文化財保護協会

理 事 長　　吉崎 貞一

理 事 長　　吉崎 貞一

事 務 局 長　　中島 良一

事 務 局 長　　中島 良一

企画調査課長　　近藤 滋

専門員兼企画調査課長　林 博通

調査第一係長　　大橋 信弥

調査第一係長　　大橋 信弥

〃　技師　　小竹森直子

調査普及課技師　小竹森直子

〃　技師　　平井 美典

調査第一係技師　平井 美典

総 務 課 長　　山下 弘

総 務 課 長　　山下 弘

6. 本書は、小竹森と平井が調査担当部分を分担執筆し、小竹森が編集を行なった。

7. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

本文目次

序

例 言

第1章 位置と環境 1

第2章 調査の経過と方法 3

第3章 調査結果 4

 1. 試掘調査 4

 2. 発掘調査 6

第4章 まとめ 38

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図 1

第2図 試掘調査グリッド・発掘調査トレーンチ配置図 2

第3図 試掘調査グリッド土層柱状図(1) 4

第4図 試掘調査グリッド土層柱状図(2) 5

第5図 T1-SB1・SD2 平面図・断面図 6

第6図 T1全体平面図 7

第7図 T2-SD1・SD2・SD3 断面図 8

第8図 T2全体平面図 9

第9図 T3-SB1・SB2・SD1 平面図・断面図 10

第10図 T3全体平面図 11

第11図 T4-SB1・SB2・SB3・SB4 平面図・断面図 12

第12図 T4全体平面図 13・14

第13図 T5全体平面図 15

第14図 T6全体平面図(1) 18

第15図 T6全体平面図(2) 19

第16図	T 6 全体平面図(3)	20
第17図	T 6 全体平面図(4)	21
第18図	T 6 全体平面図(5)	22
第19図	T 6 全体平面図(6)	23
第20図	T 6 - SH 1・SB 1 平面図・断面図	24
第21図	T 6 - SD・SK・SE類 平面図・断面図	25
第22図	T 6 出土遺物実測図(1)	26
第23図	T 6 出土遺物実測図(2)	27
第24図	T 7 全体平面図(1)	29
第25図	T 7 全体平面図(2)	30
第26図	T 7 全体平面図(3)	31
第27図	T 7 出土遺物実測図(1)	32
第28図	T 7 - SK 3・SK 6 平面図・断面図	33
第29図	T 7 出土遺物実測図(2)	35
第30図	T 8 - SB 1 平面図・断面図	36
第31図	T 8 全体平面図	37
第32図	補足資料(T 6周辺採集土器実測図)	39

図 版 目 次

- 図版1 1. T 1 西半全景(北東から) 2. T 1 東半全景(南西から)
- 図版2 1. T 1 - SB 1(南西から) 2. T 1 - SD 2 土層堆積状況
- 図版3 1. T 2 全景(南西から) 2. T 2 全景(北東から)
- 図版4 1. T 2 - SD 2(南東から) 2. T 2 - SD 3(南東から)
- 図版5 1. T 3 全景(北東から) 2. T 3 - SD 1 土層堆積状況
- 図版6 1. T 4 全景(南西から) 2. T 4 - SD 1・SD 2(南東から)
- 図版7 1. T 5 全景(西から) 2. T 5 東半全景(南西から)
- 図版8 1. T 6 全景(南東から) 2. T 6 - SD 1周辺(南東から)
- 図版9 1. T 6 - SK 4・SD 3周辺(南東から) 2. T 6 - SH 1(南から)
- 図版10 1. T 6 - SB 1(東から) 2. T 6 - SE 5
- 図版11 1. T 7 全景(南西から) 2. T 7 - SK 3・SK 6・SK 7(北東から)
- 図版12 1. T 6 出土遺物(外面) 2. 同左(内面)
- 図版13 1. T 6 出土遺物(外面) 2. 同左(内面)
- 図版14 T 6・T 7 出土遺物
- 図版15 T 7 出土遺物

第1章 位置と環境

大手前遺跡と金剛寺遺跡の所在する近江八幡市は、日野川・愛知川の下流域にあたる近江最大の低地・湖東平野に位置する。湖東平野は布引丘陵・八日市丘陵等を流れでた日野川・愛知川・犬上川によって形成された扇状地・三角州から構成されているが、湖東島状山地と称される湖東流紋岩・花崗岩を基盤とする標高160m～450mの小山地が散在しており、諸河川と共に幾つかの小地域に分割されている。近江八幡市域は南を日野川、東を八日市丘陵、北を湖東島状山地の一つである觀音寺山に囲まれ、西方に琵琶湖が広がる地域である。大手前遺跡・金剛寺遺跡の所在する野田町周辺は段丘下位面端部から約500mにあり、下位面端部にあたる長光寺町近辺から発した数条の旧小河川に取り囲まれた場所である。



- | | | | | |
|---------------|-----------|-----------|-----------------|--------------|
| 1. 大手前遺跡 | 2. 金剛寺遺跡 | 3. 金剛寺城跡 | 4. 後川遺跡 | 5. 高木(浅小井)遺跡 |
| 6. 上下遺跡 | 7. 半田遺跡 | 8. 柿木原遺跡 | 9. 久郷屋敷遺跡 | 10. 蔵ノ町遺跡 |
| 11. 九里氏遺跡 | 12. 里内遺跡 | 13. 出町遺跡 | 14. 谷氏館遺跡 | 15. 御所内遺跡 |
| 16. 香庄遺跡 | 17. 森ノ前遺跡 | 18. 堀上遺跡 | 19. 馬渕遺跡 | 20. 観学院遺跡 |
| 21. 千僧供古墳群 | 22. 宮前遺跡 | 23. 上出A遺跡 | 24. 常楽寺山古墳群 | 25. 中屋遺跡 |
| 26. 慈恩寺遺跡 | 27. 小中遺跡 | 28. 西才行遺跡 | 29. 新開遺跡 | 30. 上出B遺跡 |
| 31. 老蘇遺跡 | 32. 瓢箪山古墳 | 33. 安土城跡 | 34. 安土城城下町遺跡 | 35. 觀音寺城跡 |
| 36. 観音寺城城下町遺跡 | 37. 長光寺城跡 | 38. 八幡山城跡 | A : 調査対象地(アミ部分) | |

第1図 周辺遺跡位置図



第2図 トレンチ配置図 (S=1/3000)

近江八幡市域における考古資料は旧石器時代に遡るが、明瞭な遺跡は弥生時代以降に拡がりを見せる。弥生時代前期には長命寺湖底遺跡・堀上遺跡等湖岸周辺に立地し、中期以降日野川・佐久良川・白鳥川に沿って上流へ拡散していく状況が顕著に見られる。野田町周辺では中期の出町遺跡、中期～後期の土壙墓・前方後方形周溝墓が検出された浅小井遺跡等を始めとする遺跡が存在するが、中期後半～後期末が主体となっている。

古墳時代に入ると、観音寺山の麓に安土瓢箪山古墳、雪野山山頂に雪野山古墳が築かれるが、近江八幡市域内には前期古墳は認められない。中期以降には、千曾供古墳群・蒲生町木村古墳群・安土町常楽寺古墳群等の群集墳が形成されている。集落内における基本的住居形態は古墳時代を通して堅穴住居であり、概ね7世紀前半まで大きな変化は認められない。白鳥川以南においては7世紀後半までには掘立柱建物に交代する傾向にあるが、以北では後川遺跡・上下遺跡・安土町中屋遺跡・老蘇遺跡・蒲生町外広遺跡等に見られる様に、8世紀初頭まで群として存在している。

古代においては文献から庄園関連遺跡の存在が明らかであり、金剛寺遺跡では9世紀末～10世紀後半の庄官舎的あるいは有力農民の屋敷跡と想定される企画性のある掘立柱建物群が検出されている。日野川流域に施行された蒲生郡統一条里に規制されたと考えられる掘立柱建物・溝等が部分的に検出されているが、施行時期や考古資料からの条里復原はいまだ停滞していると言わざるを得ない。

鎌倉時代以降は守護職の任にあった佐々木六角氏による支配下にあり、八日市市小脇町から移った観音寺城を拠点として、周辺に佐々木氏・家臣の居館が数多く存在している。1568年に織田信長によって観音寺城が落城すると共に佐々木六角氏が滅亡し、以後織田信長による安土城・豊臣秀次による八幡城を中心として文化・経済の中心となり、現在の集落の大半がほぼ形成されたと考えられる。

第2章 調査の経過と方法

昭和63年度県営ほ場整備事業（近江八幡市武佐地区野田工区）が大手前遺跡・金剛寺遺跡の範囲内で施工されることとなり、事前に発掘調査を行ない遺跡の保護策を講じることとなった。

まず工事対象地区内における遺構・遺物の有無とその深さを確認するための試掘調査を、昭和62年12月21日～同月26日と昭和63年4月18日～同月21日の2回に渡って実施した。試掘調査は掘削・削平を伴う排水路・切土面を対象とし、2m×3mのトレンチを計99か所設けた。この試掘調査の結果に基づき協議を行ない、切土面については盛土対応によって遺構の保護が講じられたが、排水路となる計2,700m²については発掘調査を実施することとなった。発掘調査は0.4m³級バックホーを用いて耕土除去後、更に遺構面直上まで掘削し、人力によって遺構検出・掘削を行ない、実測・写真によって記録化を図った。現地調査は昭和63年4月18日～昭和63年8月23日の約4か月間を要し、整理調査は平成元年度に実施した。

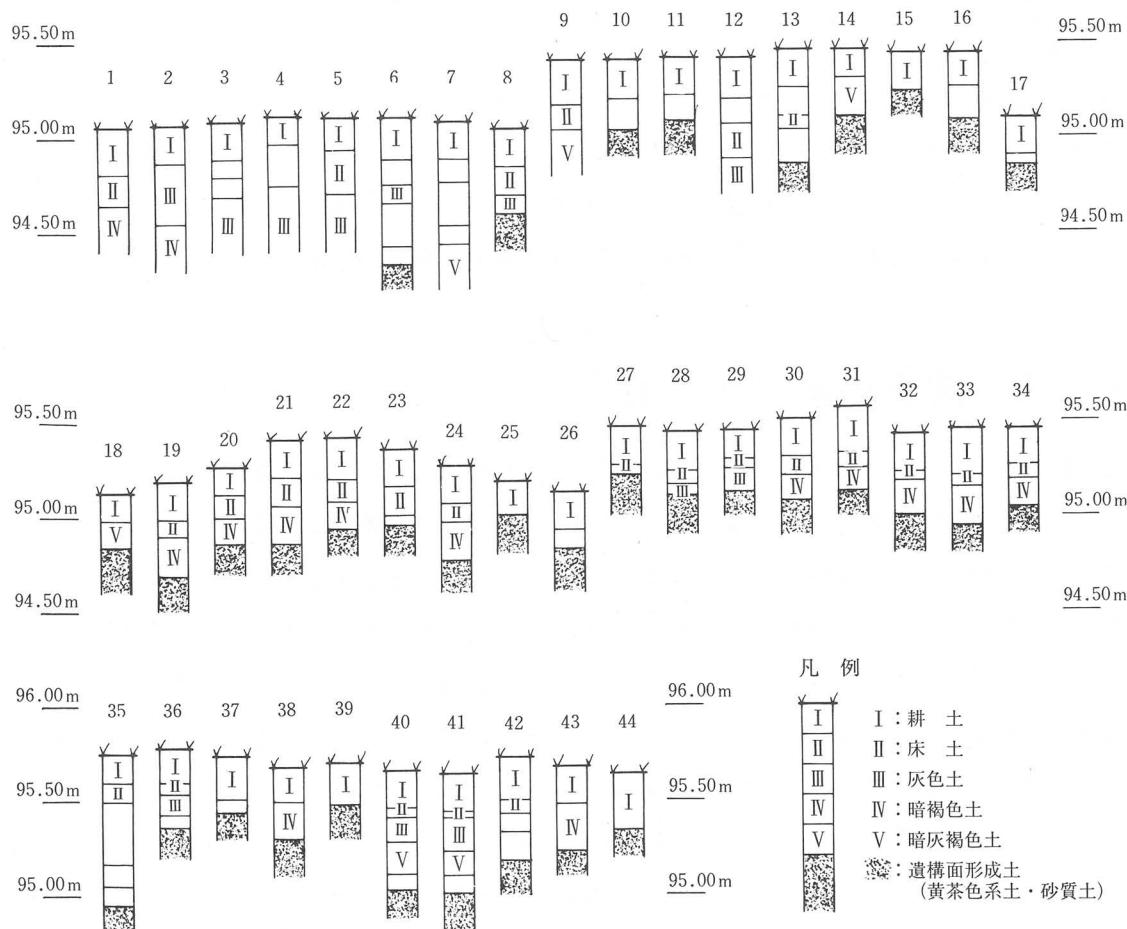
第3章 調査結果

1. 試掘調査

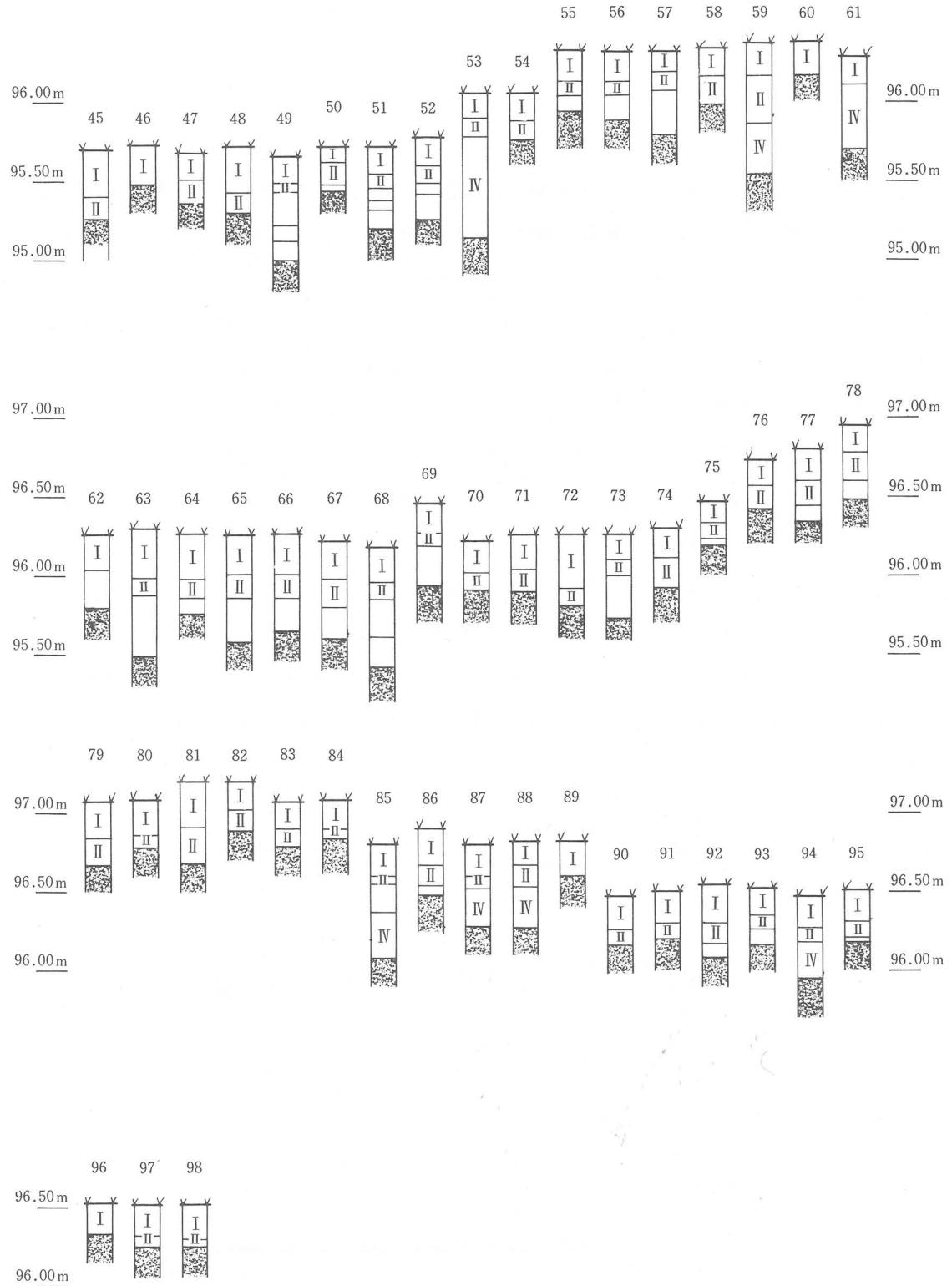
基本層序は、耕土約15cm・床土約10~15cm・暗褐色土約15~20cmであり、黄橙色系砂質土が遺構面形成土となっている。現況においても調査対象地は南が高く約2mの比高差があるが、遺構面検出標高（94.5m~96.9m）においてもその傾向は看取される。

遺構面形成土である黄褐色系砂質土はほぼ全域で検出されるが、対象地北東端のG1~G5では無遺物層であるIV層が50cm以上堆積しており、落ち込んでいる様である。遺構もほぼ全域において確認されるが、現在の野田町集落の近辺にあたるG53~G76から北東隅の落ち込みの東側にあたるG7~G30の範囲に濃厚に存在している。検出された遺構は、径約20~50cmの円形ピット・幅約50cm~2mの溝が主であるが、集落北側においては一辺約50cm~1mの方形ピットが確認された。

遺物としては、各層に2次堆積した土師質土器等の小片が若干含まれている程度であり、遺構の明確な所属時期を決定しかねるが、概ね鎌倉時代~室町時代と想定される。また、若干の須恵器・カマド跡と想定される焼土が検出されることから、当該時期の遺構存在の可能性がある。



第3図 試掘調査グリッド土層柱状図(1)



第4図 試掘調査グリッド土層柱状図(2)

2. 発掘調査

試掘調査の結果に基づき、工事により直接影響を受ける排水路（T 1～T 8）について、以下トレンチ番号ごとに遺構・遺物の順に記すこととする。尚、遺跡全体の把握については章を改めることとする。

(1) T 1

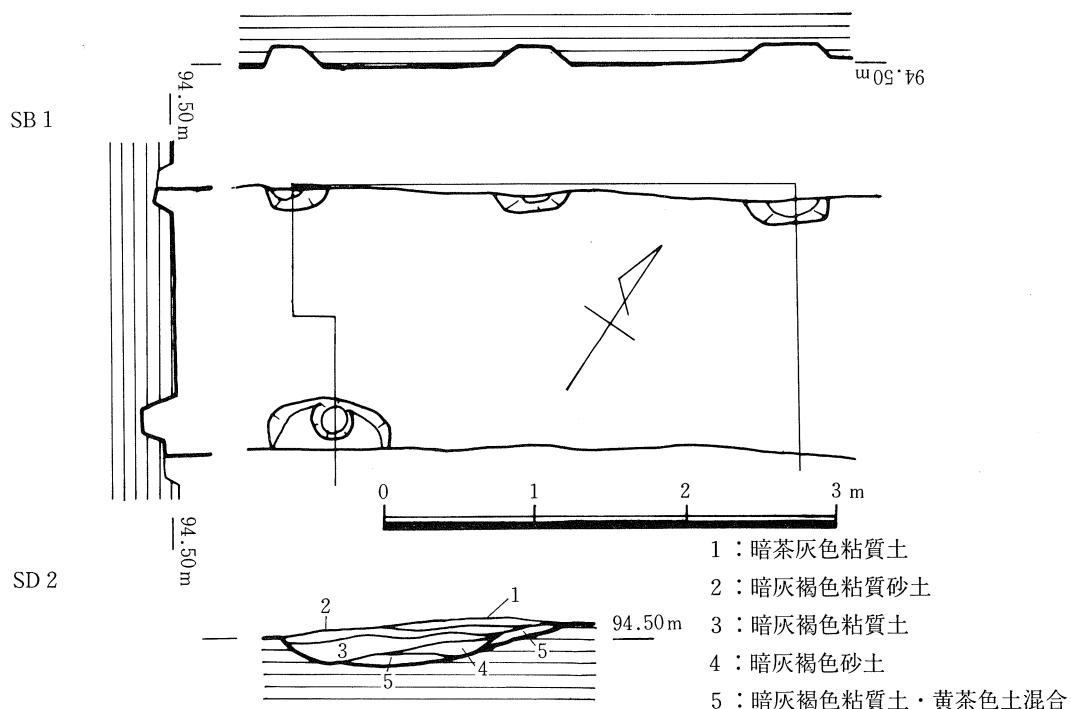
幅約1.7m・延長約68.5mのトレンチであり、調査区の北西部に位置する。主要遺構は、掘立柱建物1棟・土壙5基・溝3条である。遺構はトレンチの東西両端に限られており、中央部約30mの緩やかな落ち込みには、暗褐色土・黒褐色粘土が厚く堆積している。

SB 1 トレンチの西端に位置する東西2間×南北1間以上の掘立柱建物である。主軸方位はN-34°-Wを取り、柱穴は径約60cm～80cmの円形もしくは隅丸方形である。

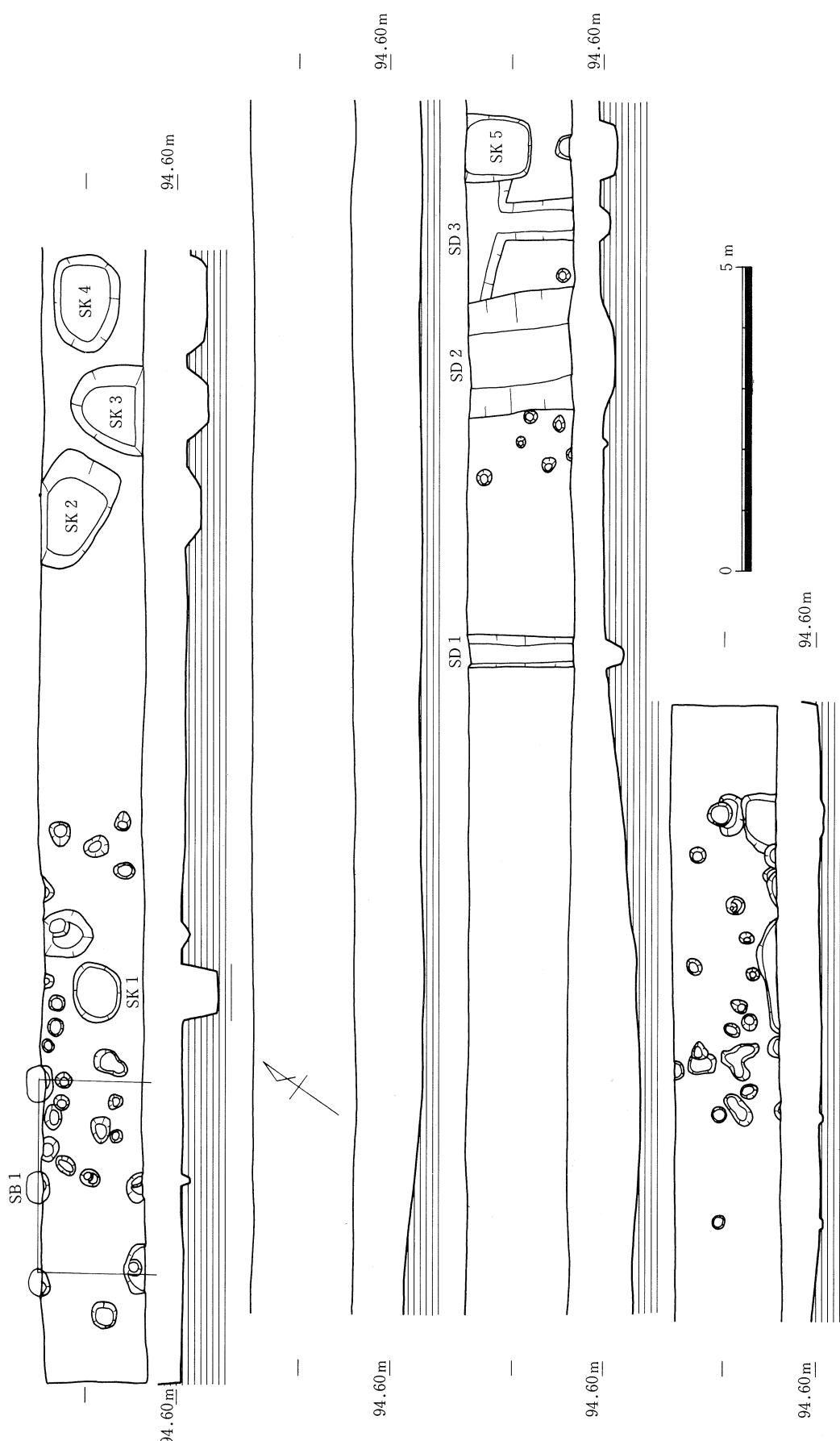
SK 1 SB 1の東側に位置する径約1m、深さ約60cmを測る円形の土壙である。遺構内埋土は、上層が礫混じりの暗褐色土、下層が暗褐色土であり、遺物は出土しない。

SK 2・3・4 トレンチ西端の柱穴集中部分から若干離れて検出された3つの楕円形土壙である。長径約1.6m～1.9m・短径約1.2m～1.6m・深さ約30cmを測り、底面は皿状を呈する。埋土はいずれも礫混じりの暗褐色土の単一層であり、遺物は検出されていない。

SD 1・2・3 中央落ち込みの東側に位置し、N-34°-Wに延びている。幅は、SD 1・3が約50cm、SD 2が約2mである。SD 2は底面が緩やかであり、埋土は暗灰褐色系土で構成されるが、砂質土と粘質土が交互に堆積している。SD 1・3の埋土は、暗灰褐色粘質土の単一層である。SD 2の西辺に径約25cmの柱穴が認められ、柵列的施設の存在も想定される。



第5図 T 1 - SB 1 · SD 2 平面図・断面図



第6図 T1全体平面図

(2) T 2

現水路を挟んでT 1の東側に位置する、幅約2m・延長約50mのトレンチである。主要遺構は溝3条・土壙1基・柱穴である。トレンチ西端は緩やかに落ち込んでおり、この落ち込み東辺に位置するSD 1より東側に遺構が認められる。

SD 1 幅約90cm・深さ約25cmを測り、N-22°-Wに延びる溝である。底面は平坦であり、埋土は上層黒褐色土・下層暗褐色粘質土の2層から成る。

SD 2 SD 1の東約2mに位置し、SD 1と並列して延びる幅約1.6m・深さ約50cmの溝である。底面中央部が幅約40cmのU字形に掘り込まれており、壁面への鉄分の凝着が著しい。埋土は上層から黒褐色土・暗灰褐色系砂土・暗灰色粘土に大別され、中位層にあたる第3層から土師器片・須恵器片が出土している。磨滅が著しく、また小片であるために図示し得ないが、概ね8世紀前後の杯・杯蓋であると判断される。

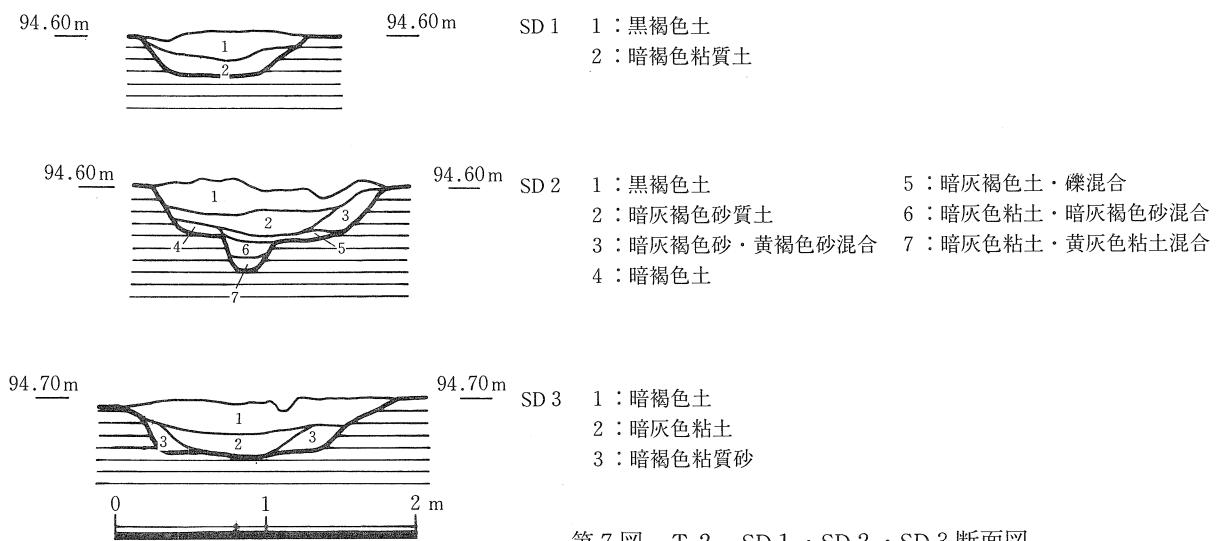
SD 3 N-30°-Wに延びる、幅約2m・深さ約40cmの溝である。底面は平坦であり、埋土は暗褐色土と暗灰色粘土の上下2層に大別される。下層の暗灰色粘土層からは、SD 2と同様の土師器・須恵器の小片が出土している。

SK 1 SD 2の東側約4.5mに位置する深さ約40cmの土壙であり、推定径約2.5mの隅丸方形もしくは長方形を呈する。埋土はSD 3と類似し、同様の土器類小片が出土している。

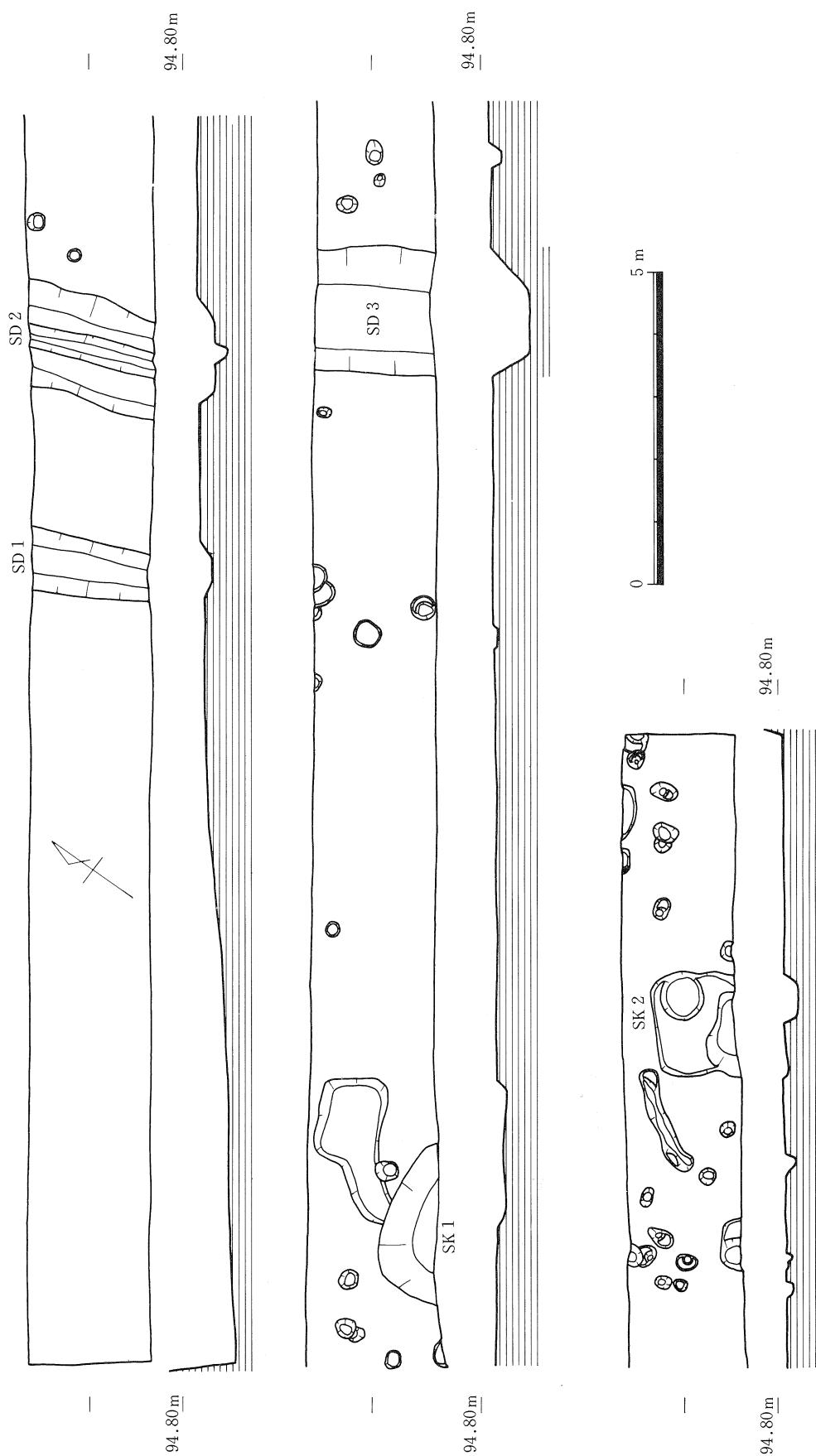
(3) T 3

T 2の東側に位置する、幅約2m・延長約68mのトレンチである。主要遺構は、溝7条・掘立柱建物2棟である。

SD 1~7 トレンチ西半には、N-37°-Wに延びる溝が7条並列している。SD 2・5・6は浅い皿状を呈するに過ぎないが、SD 1・3・7は規模・形状が類似している。幅は約2m・深さは約50cmを測り、埋土は暗灰褐色土と暗灰褐色粘土に大別され、上層の暗灰褐色土からは黒色土器・土師質土器の小片が出土したが、図示し得ない。



第7図 T 2-SD 1・SD 2・SD 3断面図



第8図 T 2全体平面図

SD 3・7 の最下層にはスクモ質粘土と砂層の互層があり、流水もしくは滯水状態にあったと推定される。また、SD 1 の底面には、鉄分が顯著に凝着している。SD 1・3・7 の3条の溝の間隔は、15m-20mである。

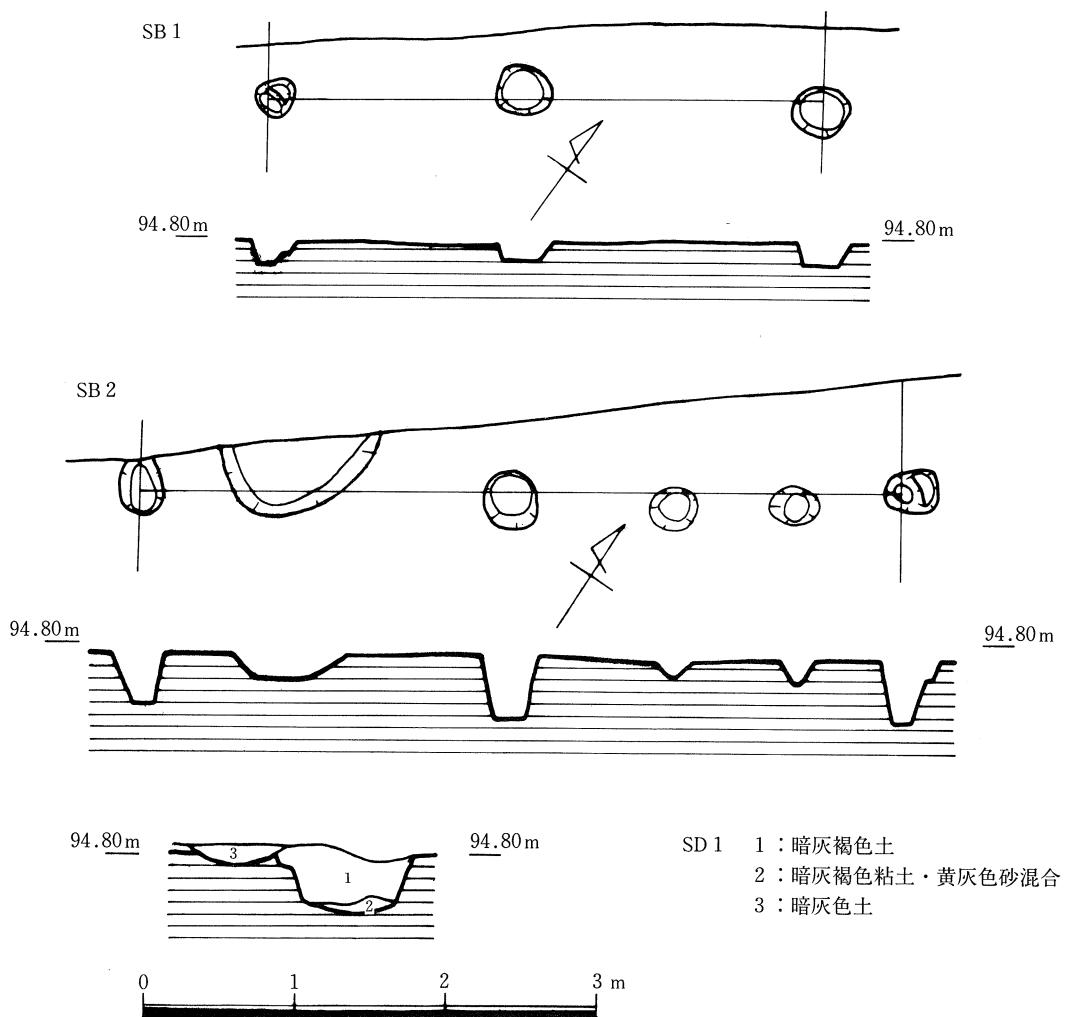
SB 1 SD 2 の東側に隣接する、東西2間×の掘立柱建物である。径約30cmの円形柱穴によって構成され、柱穴間は1.8mを測る。主軸方位は、SD 2 と同じ N-35°-Wである。

SB 2 トレンチの東寄りに位置する、東西2間×の掘立柱建物である。径約40cmの円形柱穴から成り、柱穴間は2.5mを測る。平行方位はN-33°-Wを取り、溝・SB 1 とは若干異なっている。

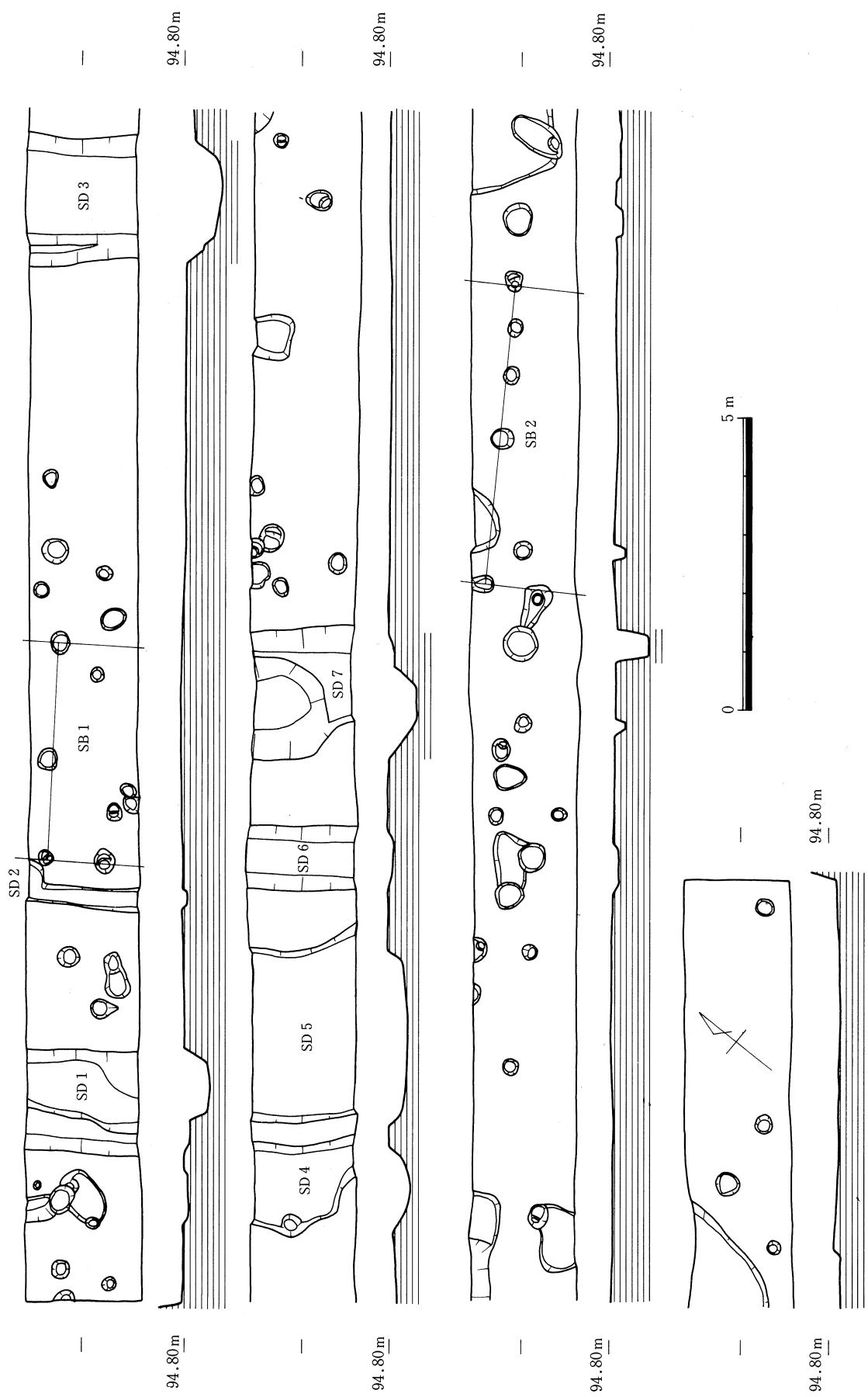
(4) T 4

T 3 の東側に続く、幅約2m・延長約97mのトレンチである。主要遺構は、溝3条・掘立柱建物2棟である。遺構面形成土は、SD 3 より東側において粘質を増し、黄褐色粘土に変質する。

SD 1 トレンチのほぼ中央を、東西に延びる溝である。幅約1.3m・深さ約40cmを測り埋土



第9図 T 3 - SB 1・2、SD 1 平面図・断面図



第10図 T 3 全体平面図

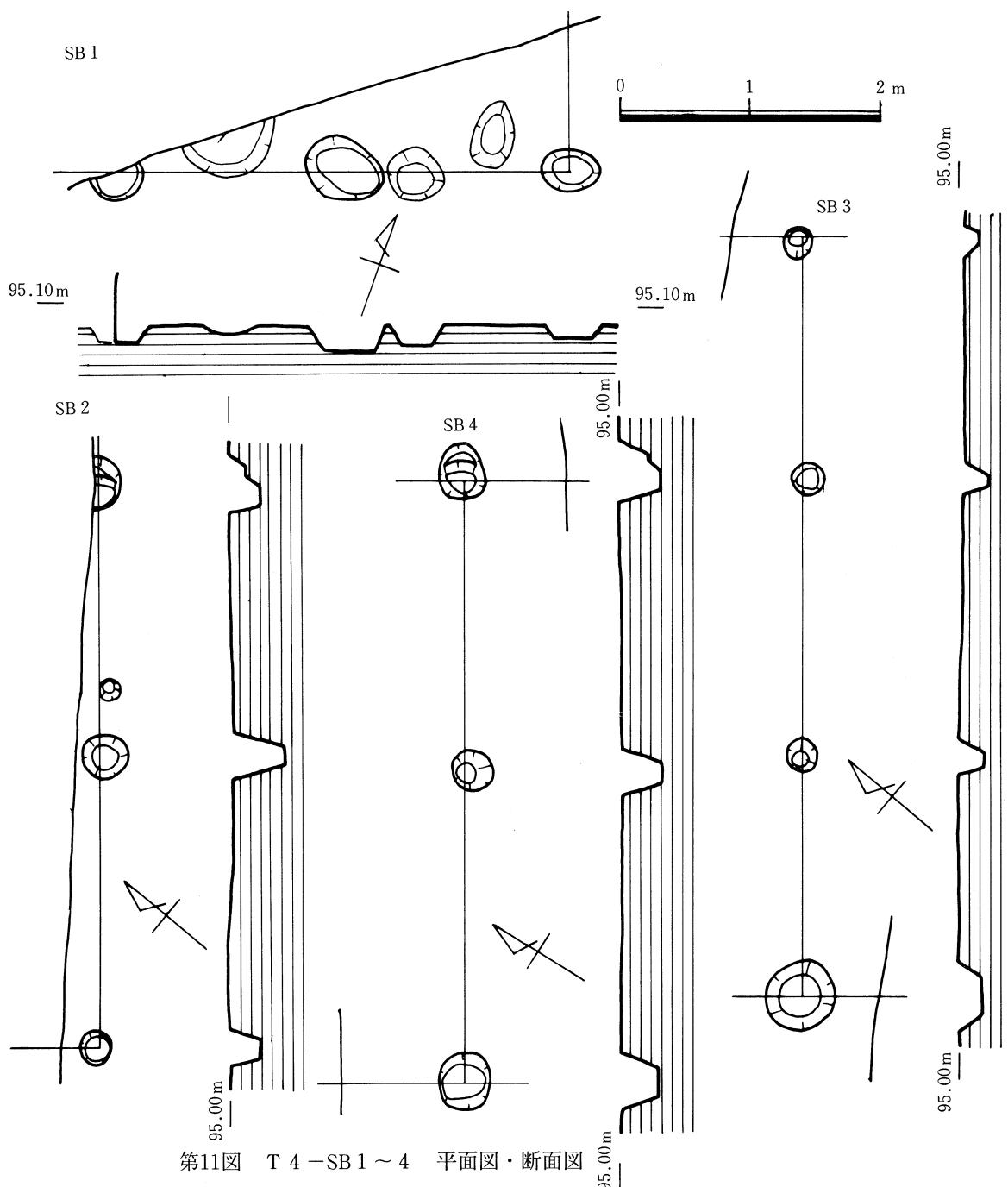
は黒褐色土の単一層である。

SB 1 径約30cmの柱穴から成る、東西2間以上×の掘立柱建物である。柱穴間は1.8mを測り N-20°-Wを主軸方位とする。

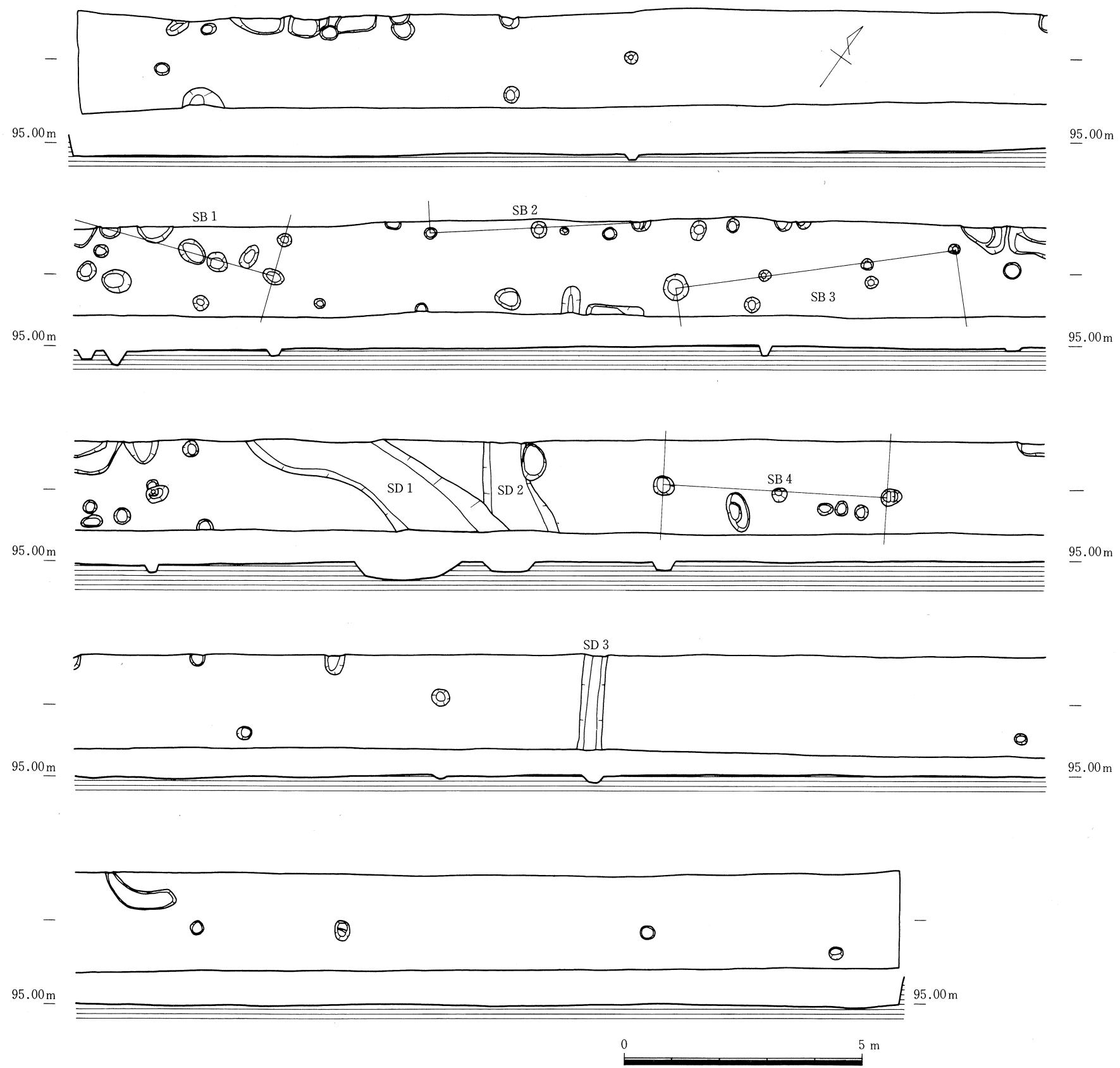
SB 2 SB 1の東に位置する東西2間以上×の掘立柱建物であり、径約40cmの円形柱穴によって構成される。柱穴間は2.2mを測り、N-40°-Wを主軸方位とする。

SB 3 SB 2とほぼ同じ主軸方位を取る、東西3間×の掘立柱建物である。径約25cmと50cmの円形柱穴から成り、柱穴間は平均2.0mである。

SB 4 SD 1の東に位置する東西2間×の掘立柱建物であり、N-32°-Wを主軸方位とする 径約40cmの円形柱穴によって構成されている。



第11図 T 4 -SB 1 ~ 4 平面図・断面図



第12図 T 4 全体平面図

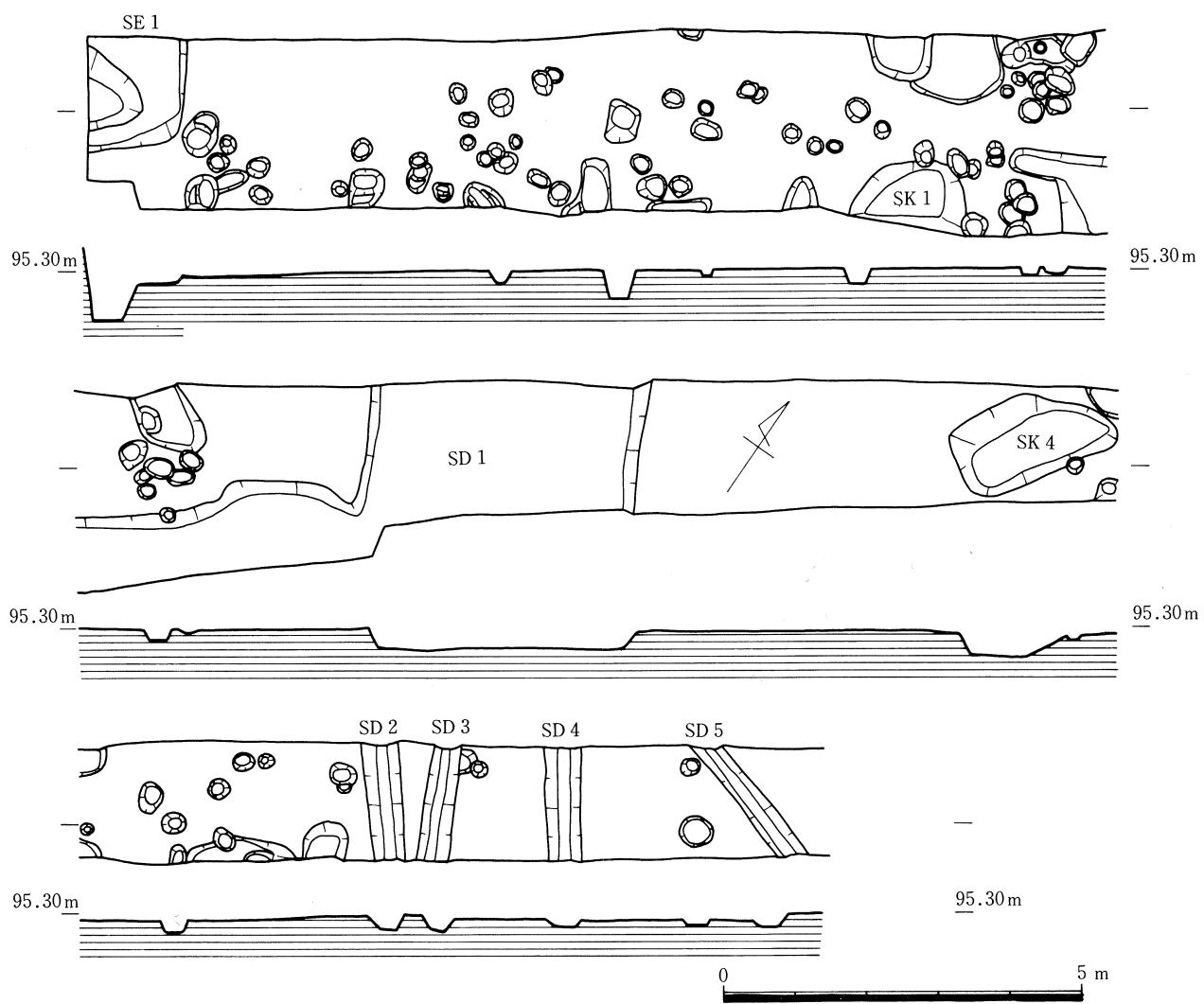
(5) T 5

T 1 ~ 4 から南へ約200mに位置する、幅約2.5m・延長約200mのトレンチである。遺構面形
成土は黄茶色土であるが、東半部においては灰色粘質土となり、遺構は認められない。西半部に
おける主要遺構は、井戸 1 基・溝 5 条・柱穴である。

SE 1 トレンチの西端において、全体の約 $\frac{1}{4}$ にあたる部分が検出された井戸である。平面形
検出時には、方形の土壙もしくは竪穴住居かと想定されたが、約15cm掘削すると更に円形の堀方
が確認された。壁面の崩壊の恐れがあるため完掘はできなかったが、埋土は近似した暗茶褐色系
土の互層である。土師質土器の小片が含まれるが、図示し得ない。

SD 1 幅約3.8mを測り、屈曲して延びる溝である。深さは約30cmであり、底面は平坦である
埋土は、暗茶褐色土・黄褐色粘質土の上下2層から成り、遺物は出土していない。SD 1 より
西側では柱穴が密に検出され、掘立柱建物の存在が想定されるが、東側では稀薄になっており、
この溝が区画的な機能を有していたとも考えられる。

SD 2 ~ 5 遺構検出部分における東端に近接して存在する4条の溝である。方向は異にする
ものの、幅・深さ・形状等は似通っている。暗褐色粘土を埋土とし、遺物は認められない。



第13図 T 5 全体平面図

(6) T 6

現在の野田町集落北東辺に接する形で設定した幅約3m・延長約257mのトレンチである。主要遺構としては、竪穴住居1棟・掘立柱建物1棟・溝・土壙・井戸が検出された。

SH 1 1辺4m以上を測る平面方形の竪穴住居である。検出面から床面までの残存する深さは約20cmであり、幅約40cmの壁溝が巡る。床面には数か所に柱穴状の窪みが認められるが、竪穴住居に伴う柱穴となるものではない。埋土は黒ボクと称される黒褐色土であり、その細分および堆積状況から壁溝は住居廃絶後に埋没したことがうかがえる。

床面から10cm浮いた状態で、須恵器杯身（第22図・1）が出土している。口径12.5cm・器高3cmを測る。丸味を持った体部に外上方へ屈曲する口縁部を持ち、口縁端部は上方へ摘み出されている。内面および体部外面は回転ナデが施され、底部外面には切り離し後に弱いナデが加えられている。胎土は若干砂質であり、焼成はやや甘く明灰色を呈する。

SB 1 南北2間（約4.1m）×東西2間（約3.4m）以上の規模を有し、総柱掘立柱建物と想定される。柱通りは悪く、歪んだ平面形を呈している。主軸方位は東辺がN-5°-Wに、北辺を基準にするとN-8°-Eに取る。柱穴は径約30cm・深さ10~40cmを測る円形のものであり、黒褐色土を埋土とする。柱痕跡は認められず、遺物も出土していない。トレンチのほぼ全面から検出された柱穴の中には、掘立柱建物を構成するものが多くあると考えられるが、トレンチが狭長であるために明瞭に確認されたのは、SB 1の1棟のみである。

SD 1 南北に延びる溝であり、幅2.6m・深さ50cmを測る。出土遺物には、須恵器・土師質土器・黒色土器・瓦類がある（第22図・2~11）。2は須恵器、3は灰釉碗の底部である。3は低い三日月高台を持ち、底部外面には回転糸切り痕を残す。4は、東播系片口摺鉢である。口縁部は上下に拡張され、口縁帯を形成する。色調はやや緑味を帯びた青灰色を呈する。5は土師質土器小皿、6~8は近江型黒色土器の椀である。9は巴文を持つ軒丸瓦の瓦当部であり、瓦当裏面に指頭圧痕を、周縁部側面に縄目叩き痕を残す。丸瓦10・平瓦11はいずれも凸面に縄目叩き痕、凹面に布目圧痕を残している。

SD 2 南東から北西に延びる溝であり、幅約2.2m・深さ50cmを測る。埋土中から須恵器・青磁・瓦類等が出土した（第22図・12~17）。12・13は、須恵器杯身の底部である。青磁碗の口縁部である14は、外面に蓮弁文が施され、釉調は淡青緑色を呈する。15は美濃焼の摺鉢であり、底部外面に回転糸切り痕を残している。黄白色の生地の表面に鉄釉が施され、明褐色を呈している16は、瀬戸の梅瓶であると考えられる。外面には淡緑色の灰釉が施され、底部内面には自然釉の付着が認められる。丸瓦17須恵質であり、外面は縄目叩きの後スリケシ調整、内面は布目痕が残る。

SD 3 南東から北西に延びる溝であり、T 7-SD 1と同一のものである。SE 3・4に切り込まれ、幅1.5m・深さ35cmを測る。埋土からは、須恵器・平瓦が出土した（第22図・18~20）。

SD 4 幅1.1m・深さ25cmを測る溝であり、遺物の出土は無い。

SD 5 幅1.0m・深さ20cmを測り、東西方向に延びる溝である。埋土中より黒色土器椀・土

師質羽釜が出土した（第22図・21～22）。22は鍋形の体部であると想定され、口径は21.4cmである。調整は鍔部・口縁部および胴部内面がヨコナデであり、胴部外面には指頭圧痕を残す。色調は内外面共に黒色を呈し、胴部外面には炭火物が付着している。

SD 6 幅1.0m・深さ20cmを測る溝であり、信楽の摺鉢が出土している（第22図・23）。

SK 1 SD 2・SK 2に切り込まれている土壙であり、底面は平坦である。埋土からは、須恵器杯身が出土している（第23図・1～2）。2は、口縁部を屈曲させて端部を摘み上げるものである。器壁厚が2mmしかなく、薄手のものである。

SK 2 SK 1を切り込む円形の土壙である。径1.6m・深さ1.1mを測る。埋土は、灰色土・褐色土の上下2層から成り、染め付けや信楽摺鉢の破片が出土している。井戸の可能性もある。

SK 3 SD 1に切り込まれる土壙であり、深さは約50cmである。須恵器長頸壺底部・土師質土器小皿が出土している（第23図・3～4）。

SK 4 長径5.0mを測る不整形の土壙である。底面は起伏が多く、最深部で約1.0mを測る。黄色粘土の地山を掘り込んでいるが、遺物の出土もないことから、土取り穴の様な性格が想定される。

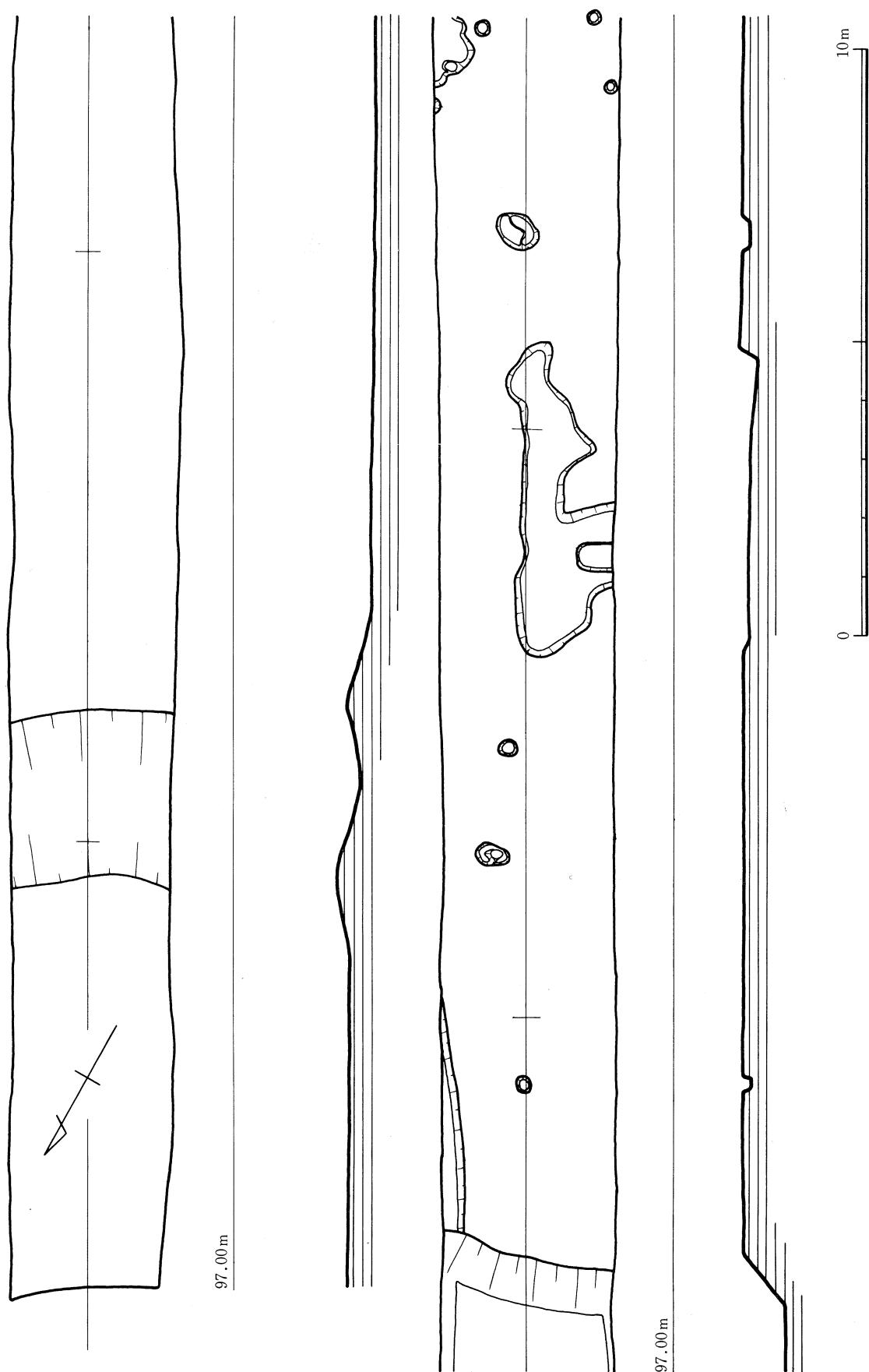
SK 5 2基の楕円形土壙が切り合っていると考えられる土壙である。深さは約20cmを測り、黒色土器碗の底部が出土している（第23図・5）。

SK 6 深さ35cmを測る土壙であり、埋土である暗褐色土には径5cm以下の小礫が多く含まれている。埋土からは、白磁碗の底部が出土している（第23図・6）。これは玉縁状口縁を持つ碗と考えられ、高台は削り出されている。体部外面下半部は回転ヘラケズリ調整、内面は回転ナデであり、見込み部に1条の沈線が巡る。内面には、全面にやや緑味を帯びた白色釉が漬け掛けされている。

SK 7 2段に掘り込まれた土壙であり、深さは30cmである。暗褐色砂礫を埋土とし、信楽摺鉢・青磁碗・砥石が出土している（第23図・7～11）。7～9は信楽の摺鉢であり、7の口縁端部は横方向へ摘み出され、上方に面を有している。青磁碗[10]は外反する口縁部を持ち、外面には横方向の沈線が施されている。釉調は、緑味を帯びた淡青色を呈する。砥石には、表・裏面および両側面に使用痕が認められる。

SK 8 一辺2.5mを測る方形の土壙であり、深さは35cmを測る。埋土は、地山である黄色土がブロック状に混入する灰褐色土である。遺物としては、瀬戸の破片が出土している（第23図・12～13）。12は、灰釉の鉢である。底部外面は回転ヘラケズリによって調整され、3方もしくは4方に粘土玉を貼り付けて脚と成している。釉は、内面および底部以外の外面に施されている。13は、鉄釉天目茶碗である。内彎する口縁部の端部は外方へ摘み出されている。釉は黒褐色を基調とし、口縁端部は釉が2度掛けされ黄褐色に発色している。

SK 9 攪乱土壙であるが、埋土中から信楽壺・瀬戸鉢・土師質炮烙が出土している（第23図・14～16）。14の信楽壺の胎土には1mm大の長石粒が含まれ、内面は褐色、外面および断面は明灰色を呈する。15の鉢の口縁部は、折曲げることにより玉縁状を呈している。胎土は灰白色であ



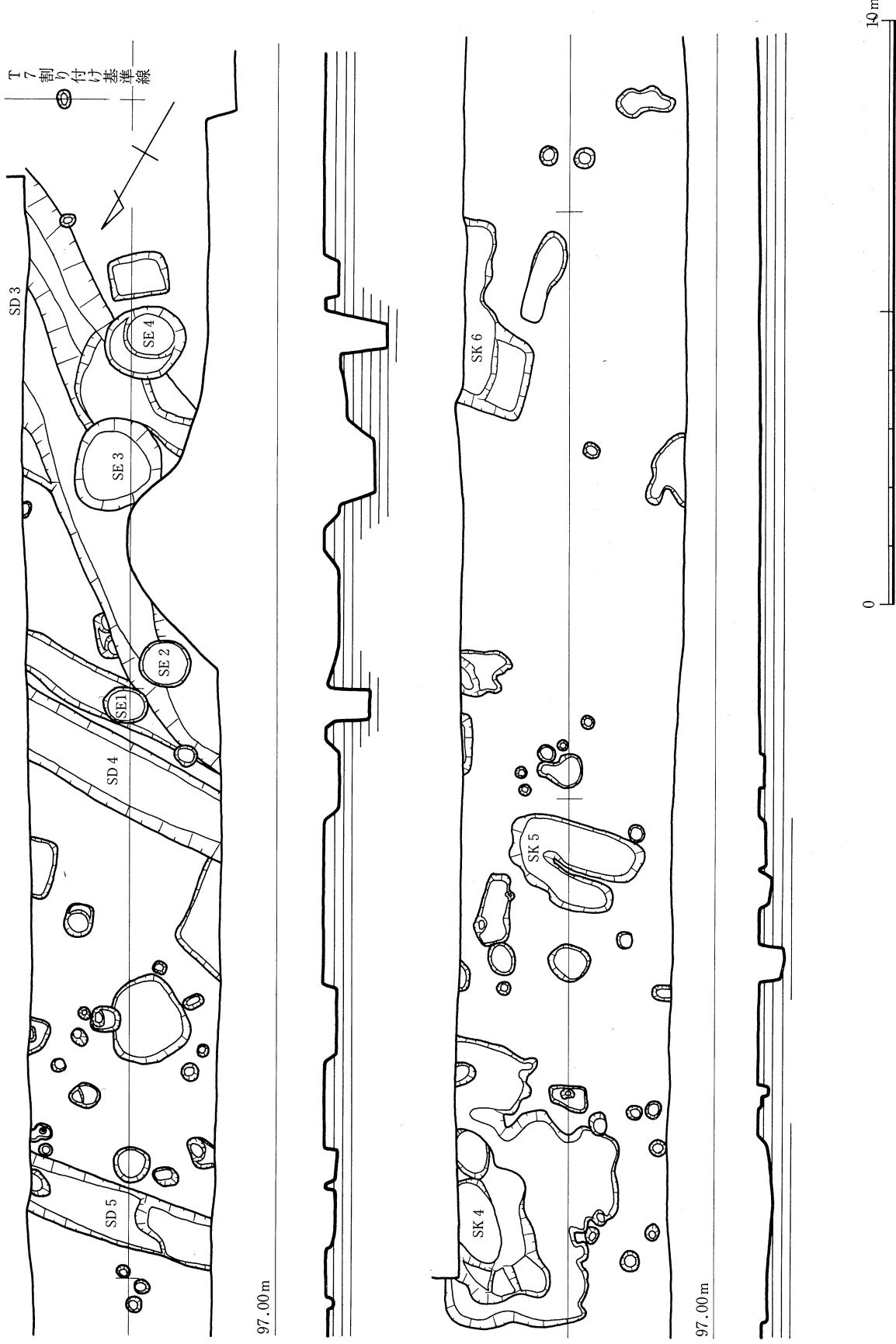
第14図 T 6 全体平面図(1)



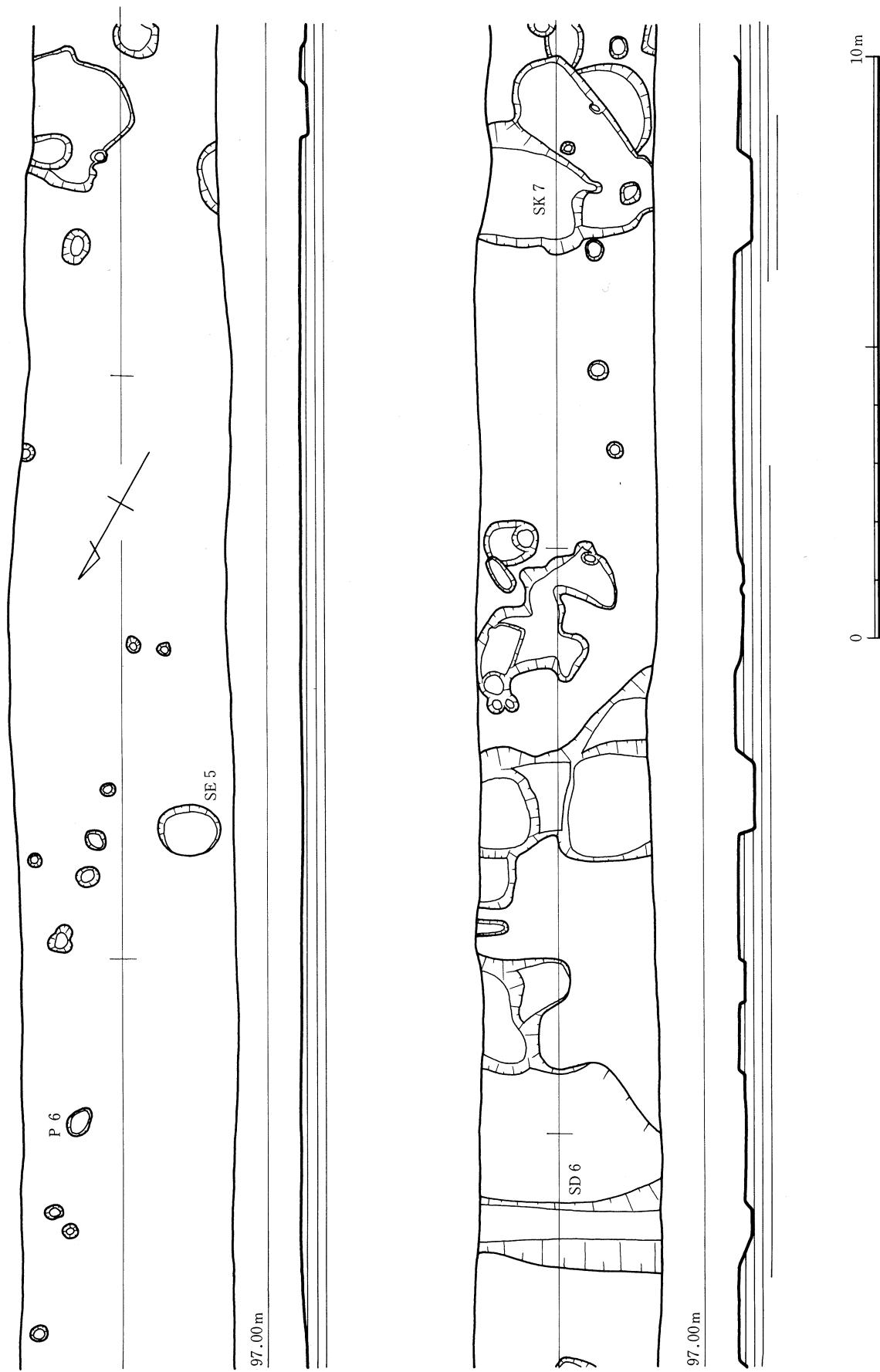
第15図 T 6 全体平面図(2)



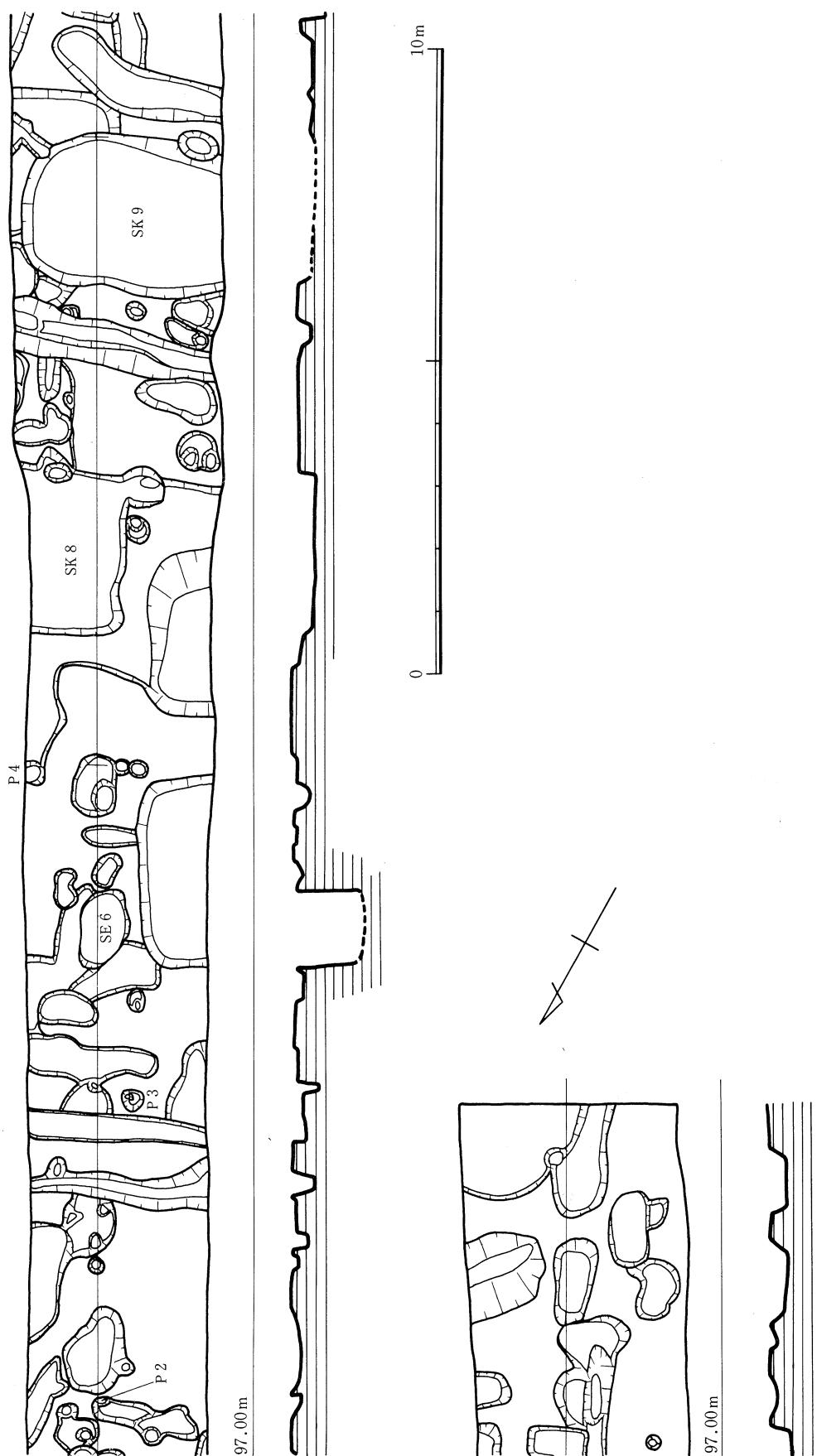
第16図 T 6 全体平面図(3)



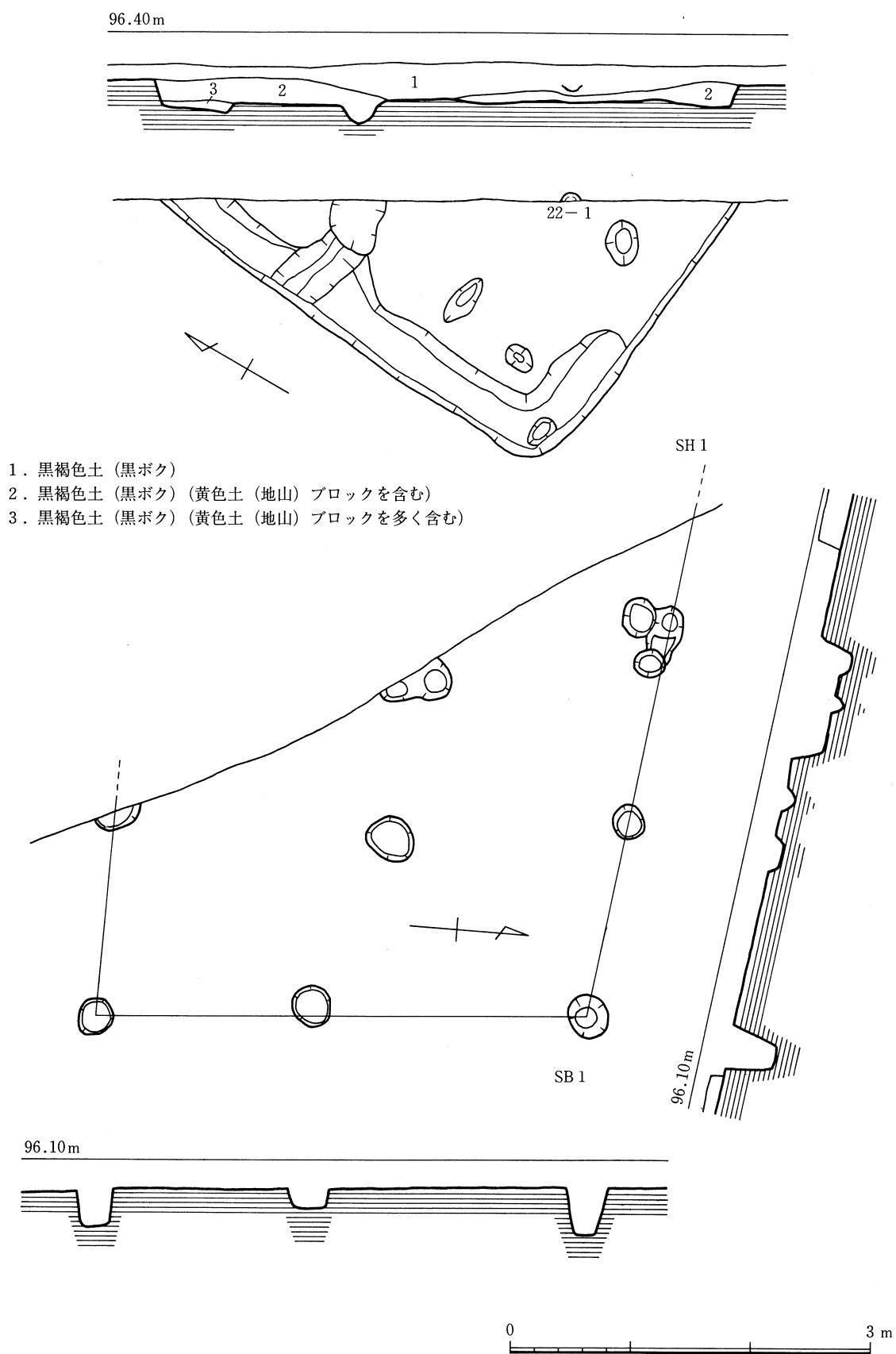
第17図 T 6 全体平面図(4)



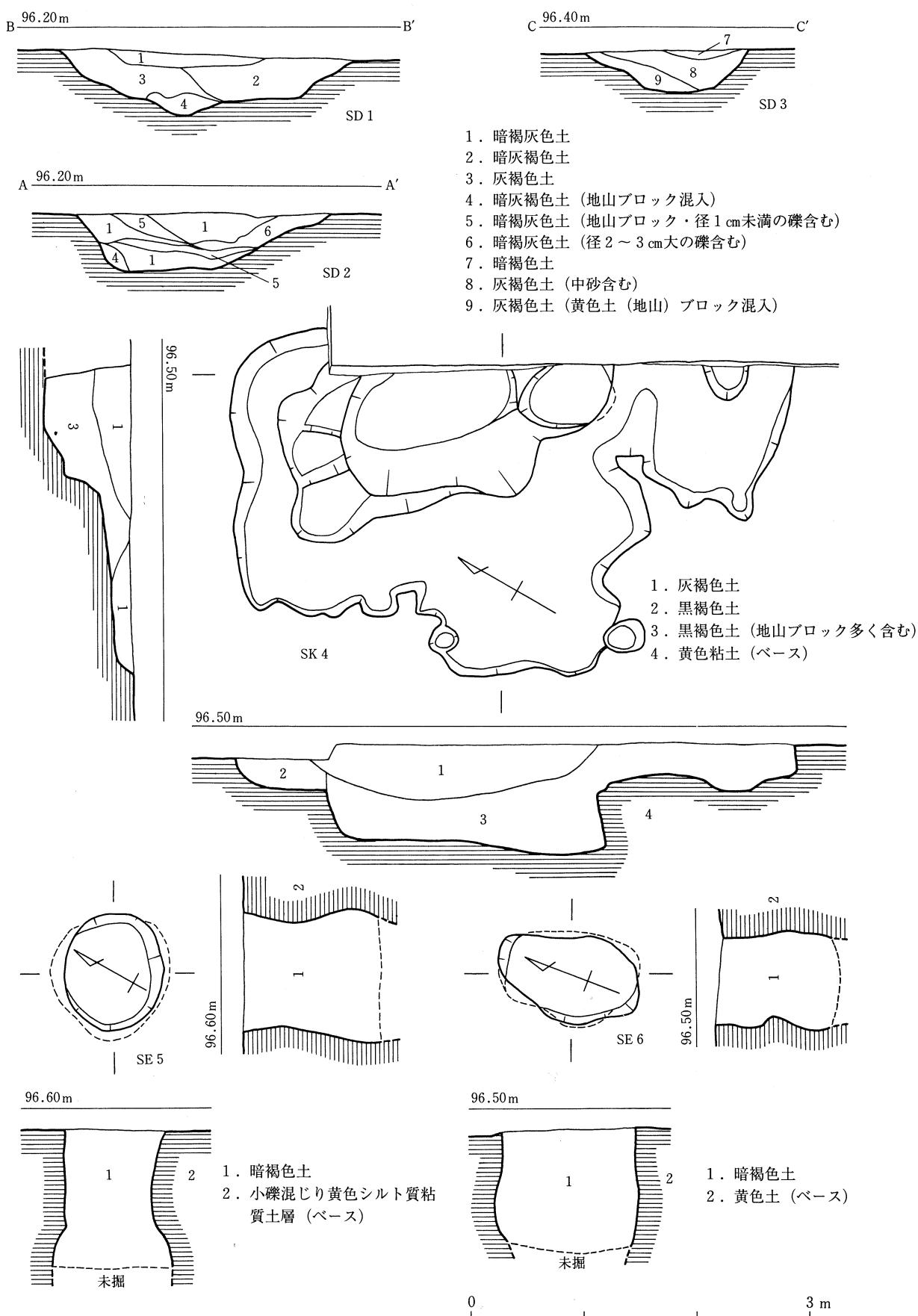
第18図 T 6 全体平面図(5)



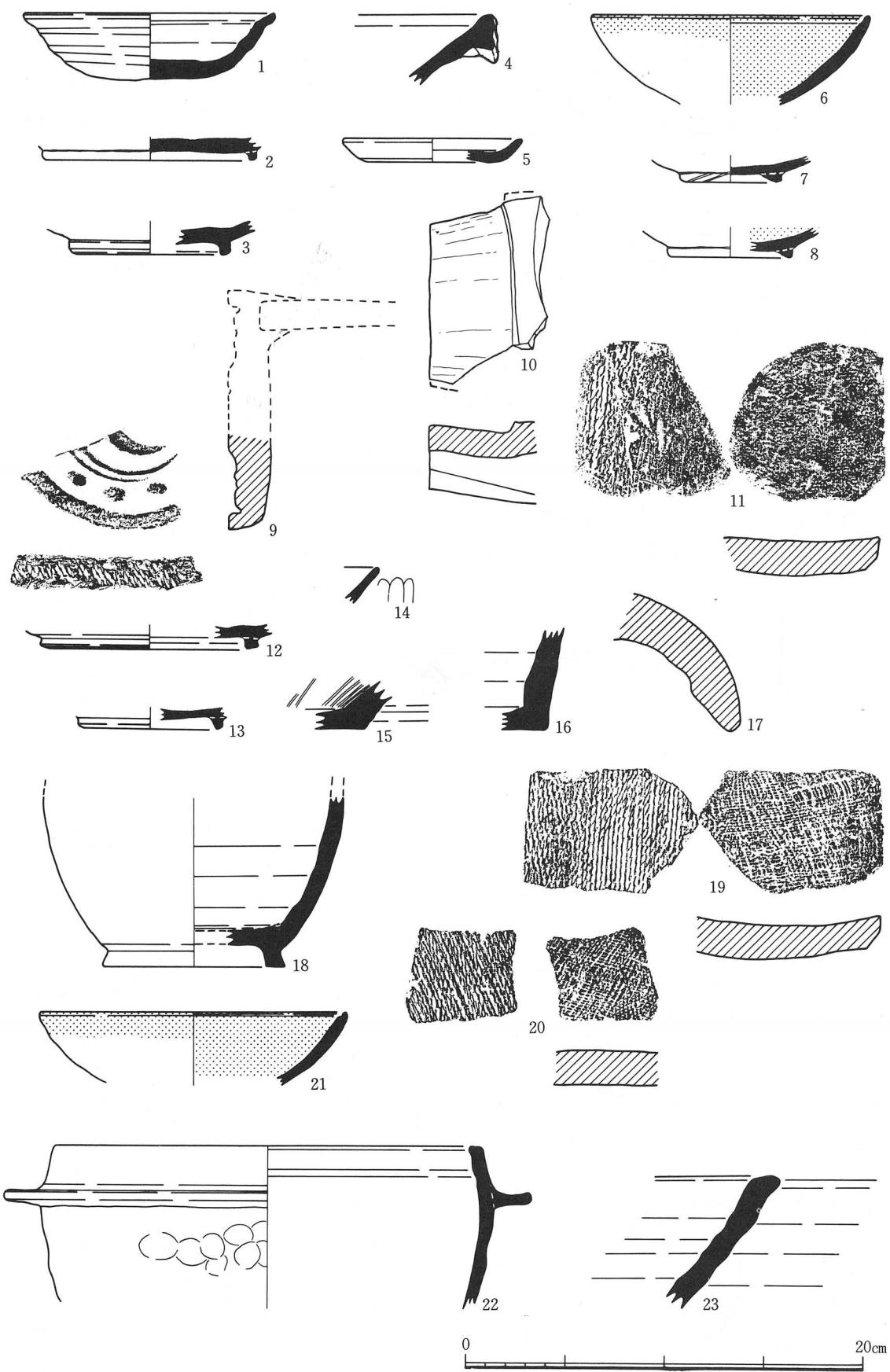
第19図 T 6 全体平面図(6)



第20図 T 6 - SH 1・SB 1 平面図・断面図

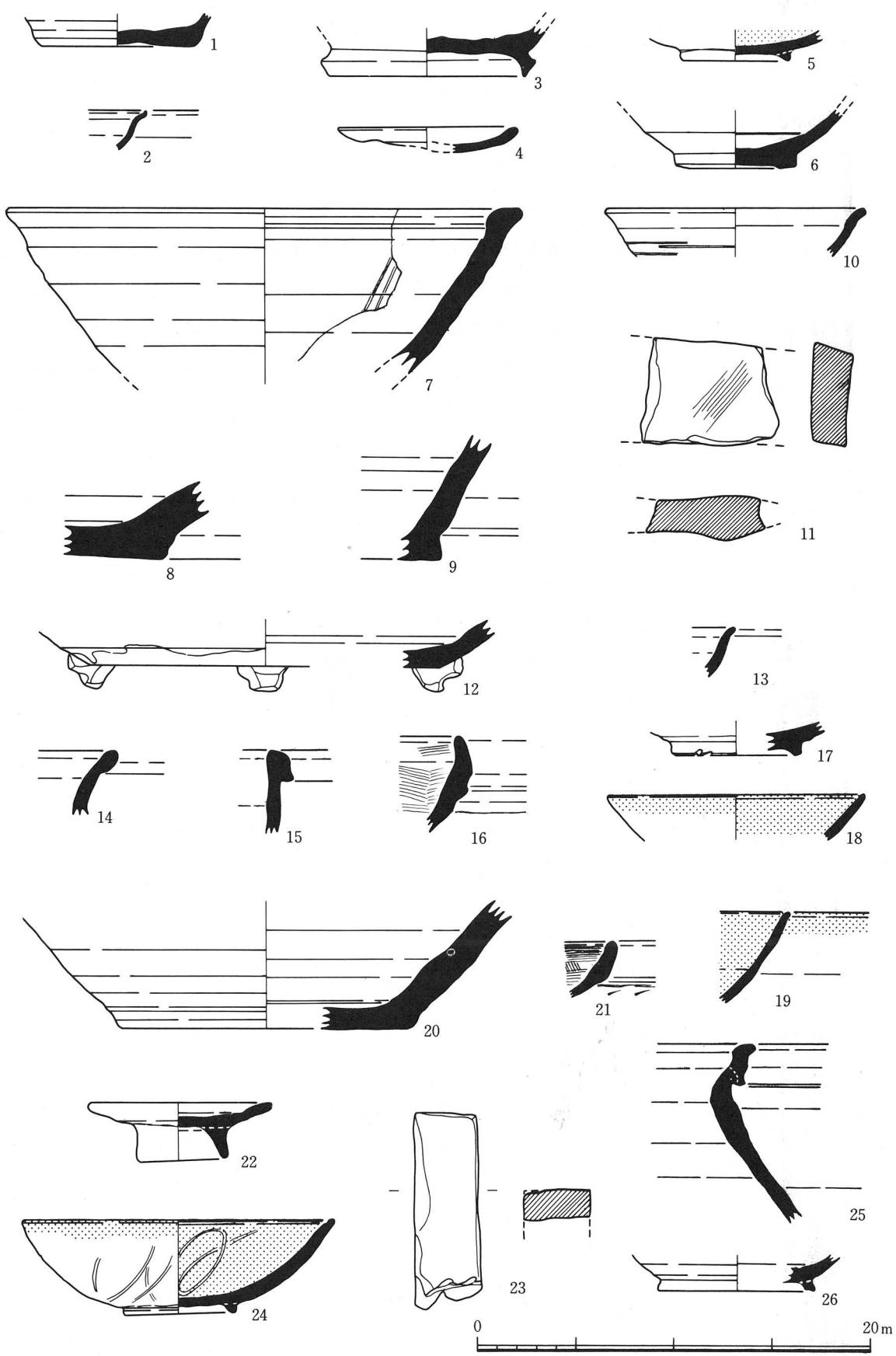


第21図 T 6 - SD・SK・SE 類平面図・断面図



SH 1 : 1、SD 1 : 2~11、SD 2 : 12~17、SD 3 : 18~20、SD 5 : 21~22、SD 6 : 23

第22図 T 6 出土遺物実測図(1)



SK 1 : 1 ~ 2、SK 3 : 3 ~ 4、SK 5 : 5、SK 6 : 6、SK 7 : 7 ~ 11、SK 8 : 12 ~ 13、SK 9 : 14 ~ 16、SE 5 : 17 ~ 19、SE 6 : 20 ~ 21、P 1 : 22、P 2 : 23、P 3 : 24、P 4 : 25、排土 : 26

第23図 T 6 出土遺物実測図(2)

り、淡緑色の灰釉が施されている。

SE 1～4 いずれも近世以降と考えられる井戸であり、出土遺物は認められない。SE 1 は長径74cm・短径60cm・深さ75cmを測る平面橢円形の井戸であり、埋土は暗灰色土である。SE 2～4 はいずれもSD 3 を切り込んでおり、埋土も暗灰色土で共通である。径はSE 2 が80cmとやや小さめであるが、SE 3・4 は約1.5mである。

SE 5 径約95cm・深さ1.2m以上の井戸であり、下部の壁面は崩落しオーバーハングする。埋土は暗褐色土の単一層であり、湧水が認められた。出土遺物には、山茶碗・黒色土器がある(第23図・17～19)。17は断面台形の高台を有し、接地面に粋痕を残す。底部外面には、回転糸切り痕が残存している。18・19は黒色土器であり、口縁端部内面に弱い沈線が巡る。

SE 6 長径1.25m・短径70cm・深さ1.05m以上の井戸である。埋土は暗褐色土の単一層であり、SE 5 と同様に壁面が崩落しオーバーハングしている。埋土中からは、信楽摺鉢・土師質が出土した(第23図・20・21)。

その他の遺構と遺物(第23図22～26) P 1 出土の台付皿22は、口径9.4cm・器高3.1cmを測る。皿部は直線的に開き、口縁端部を丸くおさめる。色調は、橙白色を呈する。23は砥石であり、火を受けている。25は信楽の甕であり、口縁部は折返しにより口縁帯をつくる。内外面共にヨコナデ調整であり、胎土には1～3mm大の長石粒を含んでいる。色調は内外面が濁橙色、断面が灰色を呈している。26は、近江型緑釉陶器である。高台は僅かに段を持ち、内面見込みには沈線が巡る。須恵質の素地であり、内外面全面に緑釉が施され、明緑色を呈する。

P 5・6 では、埋土に焼土が充満していた。

(7) T 7

当トレチは、T 6 に直交し北東方向に設定した幅約3m・延長約114mのトレチである。検出された主要遺構は、溝・土壙・沼沢地状落ち込みである。

SD 1 T 6-SD 3 の延長部分である。

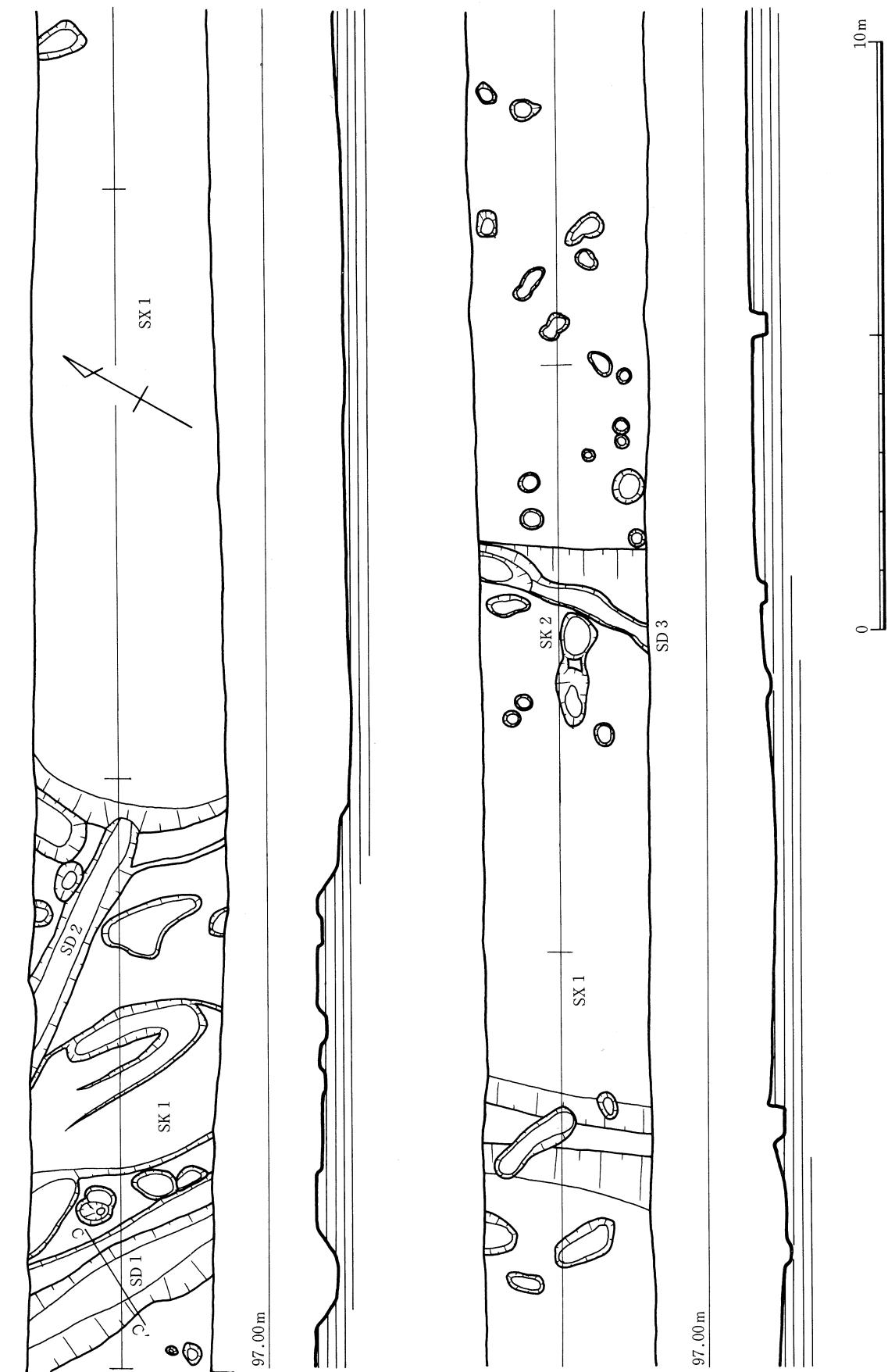
SD 2 幅60cm・深さ30cmを測る溝であり、沼沢地状落ち込みをSX 1 と接するが、切り合いは確認されなかった。しかしながら、SX 1 に向かってSD 2 の底面が低くなっていることから、SX 1 へ流れ込む排水溝的な性格が想定される。

SD 3 幅約35cm・深さ10cmを測り、南北方向に延びる溝である。

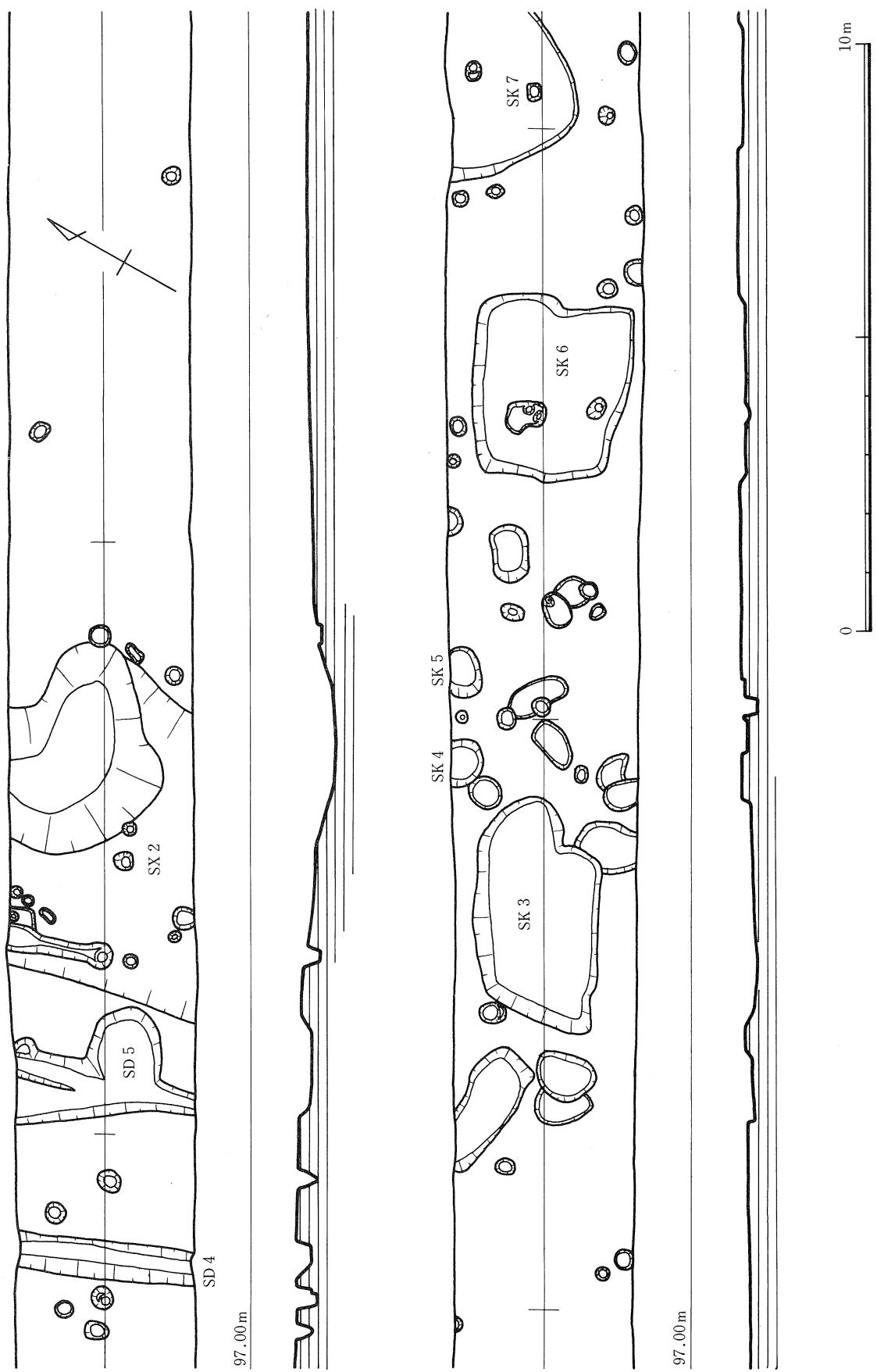
SD 4 幅60cm・深さ30cmを測り、灰褐色土を埋土とする溝である。12～13世紀代の黒色土器碗の破片が出土している。

SD 5 幅40cm～1.2m・深さ約20cmを測り、灰褐色土を埋土とする溝である。黒色土器の破片が出土している。

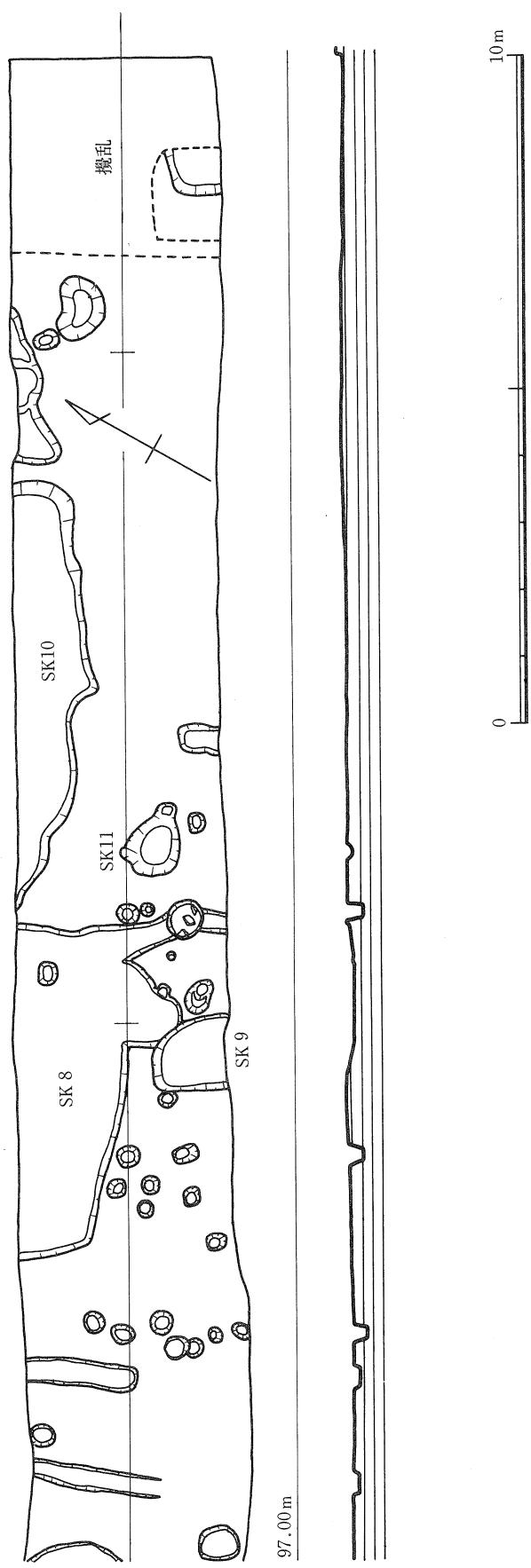
SK 1 長径4m以上・短径2.7m・深さ10cmの土壙であり、瓦と瀬戸と見られる陶器小片が出土した(第27図・1・2)。平瓦(1・2)は厚さ1.5cmを測り、凸・凹面共に粘土の切り取り痕が細線状に残っている。2の凸面には縄目叩きが認められるが、2点共に凹面には布目痕は認



第24図 T 7 全体平面図(1)



第25図 T 7 全体平面図(2)



第26図 T 7 全体平面図(3)

められない。1の凹面には離れ砂が付着し、焼成はいずれも硬質で灰色を呈する。

SK 2 長径80cm・短径60cm・深さ35cmを測る土壙である。黒褐色土を埋土とし、須恵器壺が出土している（第27図・3）。

SK 3 長径3.8m・短径2.1m・深さ20cmを測り、底面は平坦である。埋土の暗褐色土は自然堆積の状況を呈し、須恵器・土師器の破片が出土している。

SK 4 径80cm・深さ15cmを測る土壙である。埋土は暗褐色土であり、土師質の小椀が出土した（第27図・4）。口径・器高は9cm・2.9cmであり、口縁部外面に稜を持ち、口縁端部内面に沈線が巡る。底部外面には高台の剥離痕が認められる。胎土は良好であるが、焼成が甘く橙白色を呈する。4は土師質ではあるが、形態的には黒色土器の小椀であり、炭素未吸着のものである。

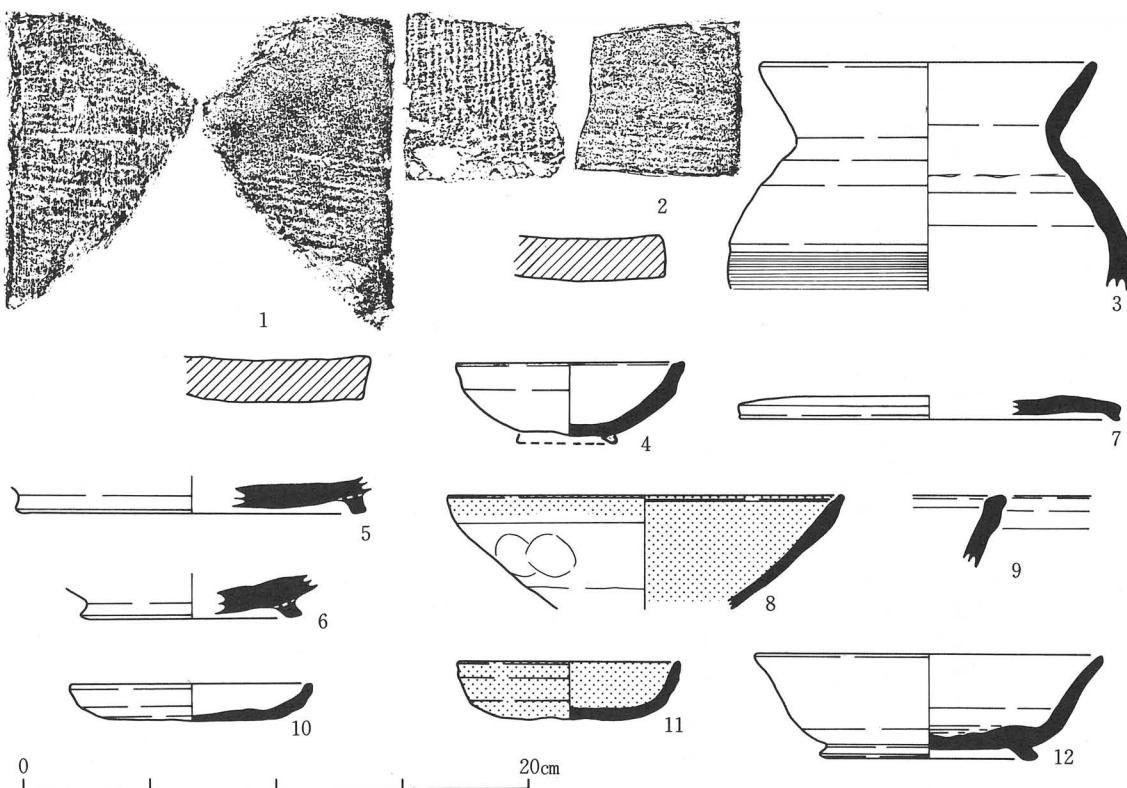
SK 5 径85cm・深さ30cmを測る。埋土は暗褐色土であり、須恵器杯身の底部が出土している（第27図・5）。

SK 6 長径3m・短径2.6m・深さ15cmを測る略方形の土壙であり、底面は平坦である。埋土である暗灰褐色土は自然堆積の状況を示し、須恵器杯身底部が出土している（第27図・6）。

SK 7 径2.8m・深さ5cmを測る土壙である。

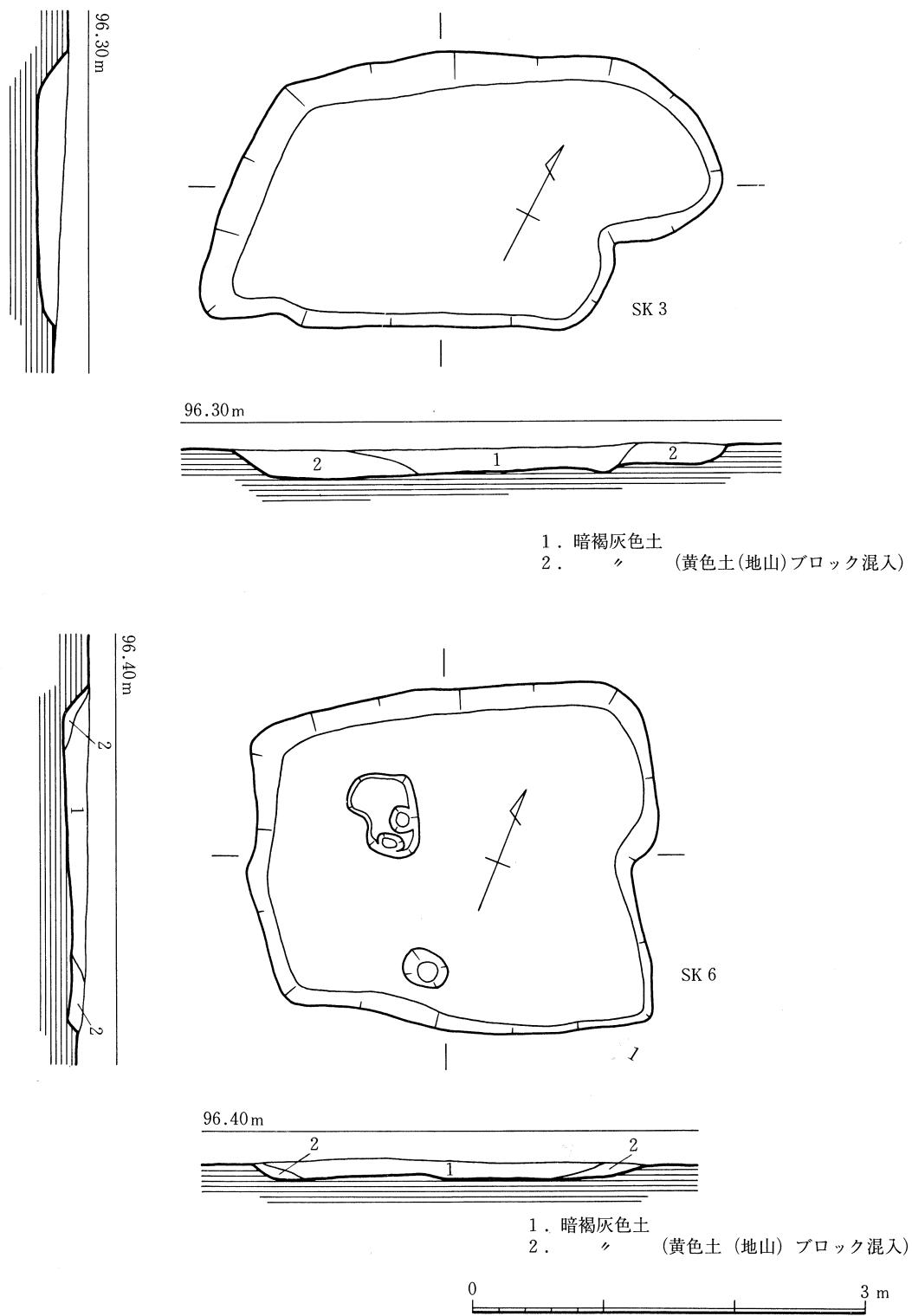
SK 8 径5m・深さ10cmを測り、埋土中から須恵器杯蓋・黒色土器碗・土師器甕の口縁部破片が出土した（第27図・7～9）。

SK 9 深さ15cmの土壙であり、土師質土器小皿・黒色土器小皿が出土している（第27図・10



SK 1 : 1～2、SK 2 : 3、SK 4 : 4、SK 5 : 5、SK 6 : 6、
SK 8 : 7～9、SK 9 : 10～11、表土直下 : 12

第27図 T 7 出土遺物実測図(1)



第28図 T 7 - SK 3・SK 6 平面図・断面図

～11)。10は土師質であり、口径・器高は 9.6cm・1.5cmである。口縁部は2段ナデによって成形され、内彎している。11は口径8.6cm・器高2.3cmを測り、口縁部は2段ナデが施されている。胎土は良好であり、内外面全面に炭素が吸着しているが、暗文やヘラミガキは施されない。

SK10 深さ20cmの土壌であり、暗灰褐色土を埋土とする。埋土内からは、須恵器・土師器の破片が出土している。

SK11 径約80cm・深さ25cmの土壌である。埋土中より、獸骨と見られる骨片が多量に出土している。

SX 1 深さ約50cmを測り、延長約28mに渡って検出された沼沢地状の落ち込みである。落ち込みの肩部は不明瞭であり、緩やかに傾斜し底面は平坦である。埋土は地山をブロック状に含む暗褐色土であり、人為的に埋められたと想定される。埋土からは、土師器・黒色土器が出土している（第29図・1～25）。1～17は土師質土器の小皿であり、口径は7.5～8.5cm前後である。口縁部形態は若干内彎するものを基本とし、1の様に外反気味のものもある。12・14の口縁部には、灯明皿として使用された際のススが付着している。18の土師質土器大皿は口径14.8cm・器高3cmを測り、口縁部は2段にヨコナデが加えられている。21～25は黒色土器の椀であり、口径15cm前後・器高4.8cm前後である。口縁端部内面には沈線が巡り、内面にはラセン状暗文が施される。高台はいびつである。2の外面には、粘土を押圧した際にいたものと考えられる爪跡が2段認められる。

SX 2 SX 1と一連の落ち込みであり、深さは最深部で約50cmである。埋土はSX 1と同じ状況を呈し、土師質土器・黒色土器が出土している（第29図・26～49）。26～39の土師質土器小皿の口径は7.2～9.6cmであり、口縁部は内彎気味である。26と29の口縁端部には、ススが付着している。40・41は土師質土器の大皿であり、復原口径は13.5～14.3cmである。42～49の黒色土器椀の口径は概ね14.5cm前後となり、口縁端部内面には沈線が巡る。45の内面には、ハケメ痕が残存している。

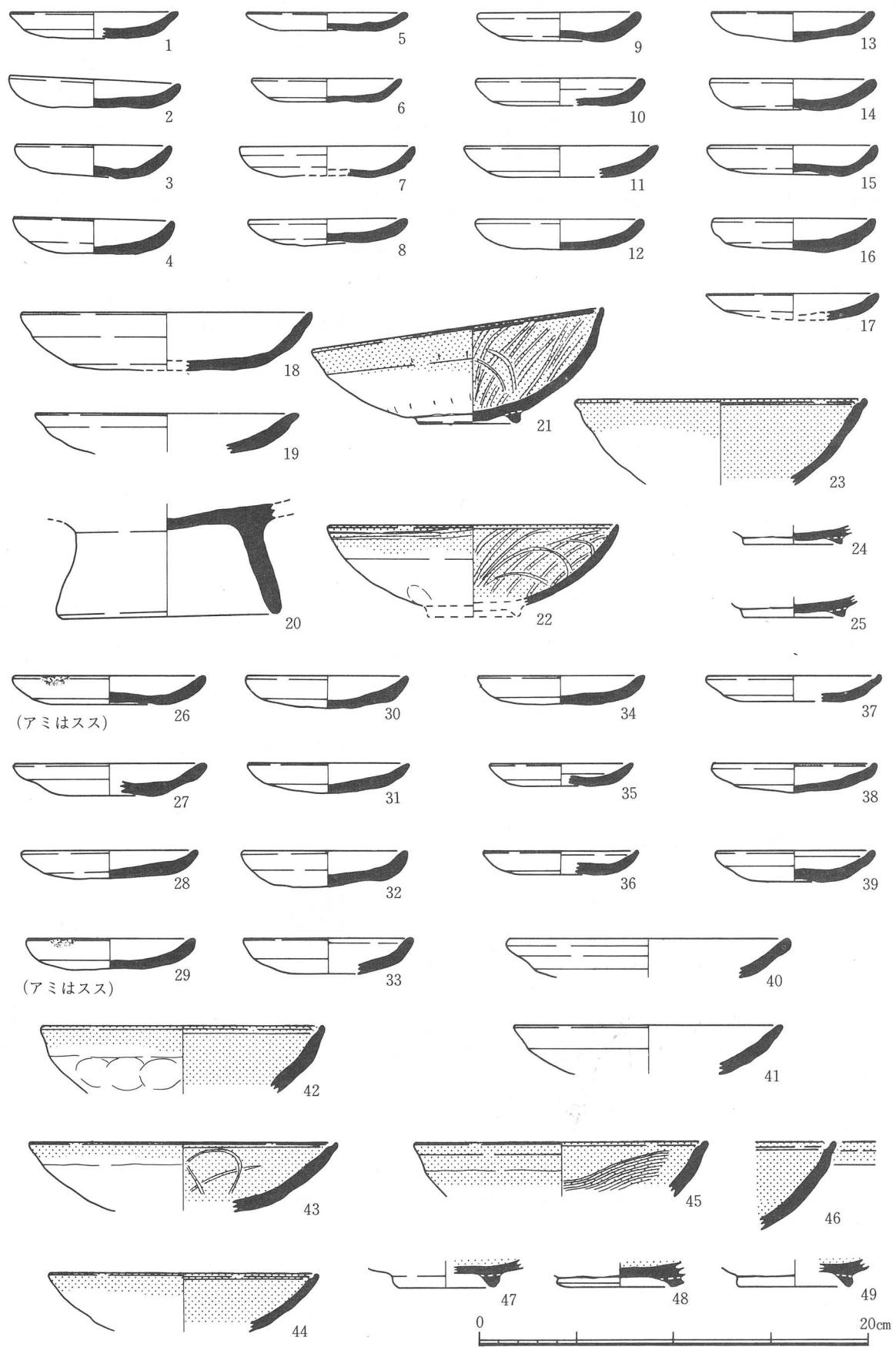
(8) T 8

T 7の南端から直交して伸びる幅約3m・延長約75.5mのトレンチである。遺構面形成土は黄茶色系土であるが、西側では砂質が強く東側では粘質が増す。検出された主要遺構は、掘立柱建物1棟・柱穴列1条・土壙3基・溝である。

SB 1 トレンチの西寄りにおいて、南東隅部分が検出された掘立柱建物である。規模は不明であるが、トレンチの北側に拡がり、N-12°-Wを主軸方位とする。柱穴は径約50cmの円形のものであり、柱根跡は径20cm前後である。暗褐色土を埋土とし、遺物の出土は認められなかった。

SA 1 トレンチの東端で検出された3間もしくは4間分の柱穴列である。径25～40cmの円形柱穴であり、深さは約20cmである。柱穴が小型であることから柵列とも想定されるが、掘立柱建物の一辺を構成するとも考えられるため、ここでは柱穴列としておく。

SK 1 長径約1.2m・短径約1.1mを測る隅丸方形の土壙である。南半部が2段掘りになって



SX 1 : 1 ~ 25、SX 2 : 26 ~ 49
第29図 T 7 出土遺物実測図(2)

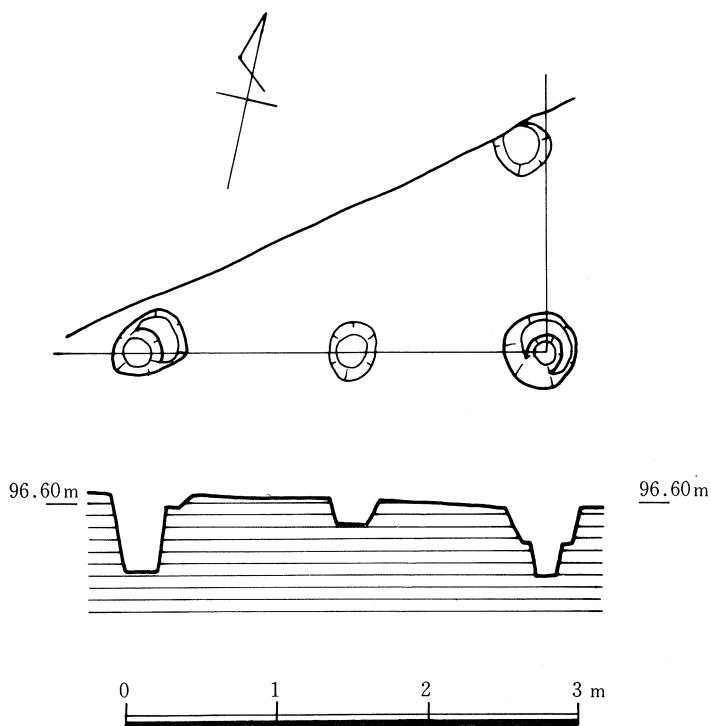
いるが、埋土は黒褐色土の単一層である。遺物の出土は、認められない。

SK 2 トレンチの東端で検出された長径約 2 m・短径約 1.5 m の橢円形土壙である。底面は平坦であり、暗褐色土を埋土としている。

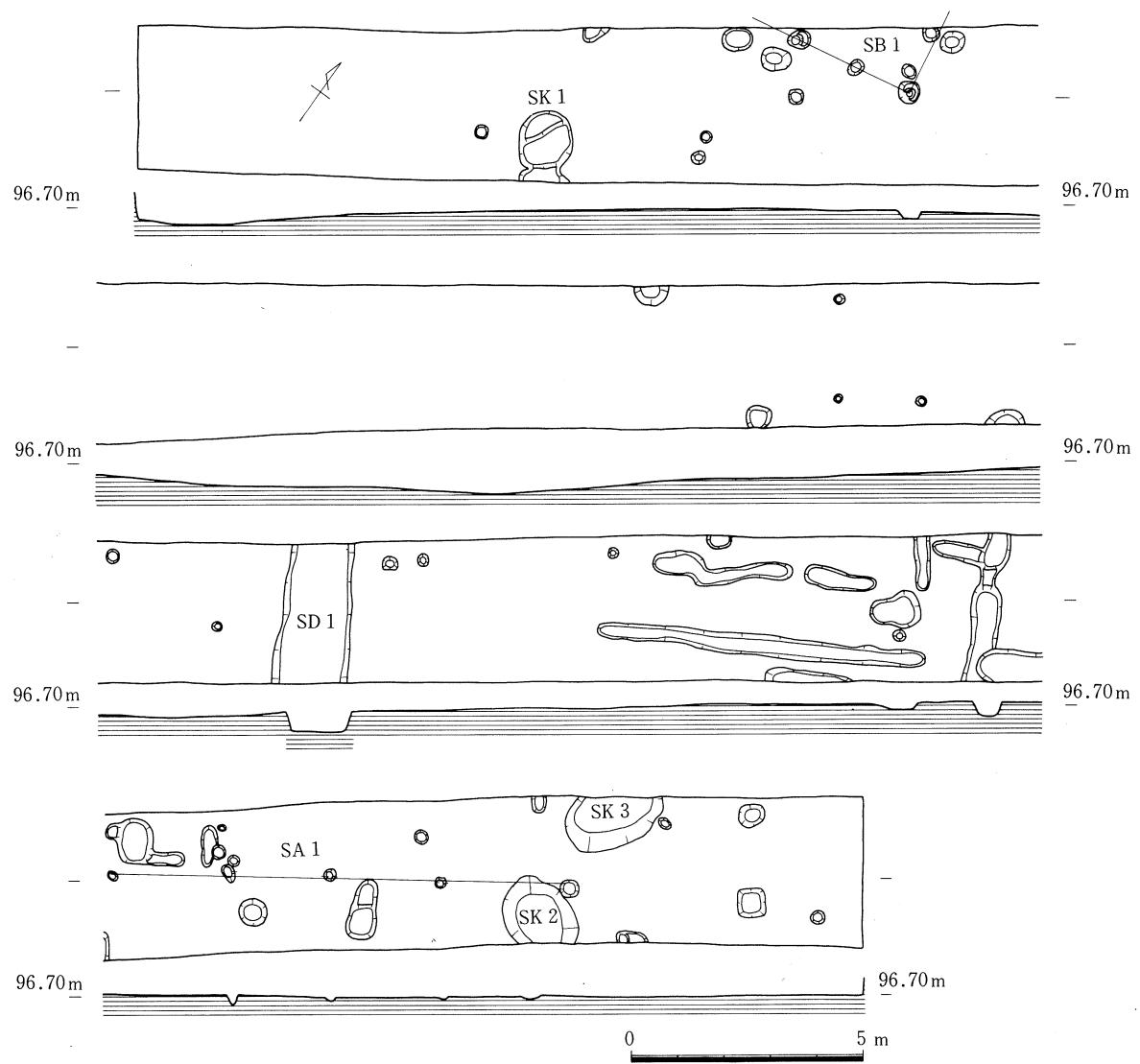
SK 3 SK 2 の北側に位置する長径約 2.2 m・短径約 1.6 m の土壙である。SK 2 と同様に橢円形から卵形の平面形を呈し、暗褐色土を埋土としている。

SD 1 トレンチのほぼ中央を N-30°-W に延びる幅約 1.5 m の溝である。深さは約 50 cm あり、底面は平坦である。埋土は暗褐色土・暗灰褐色土の上下 2 層から成り、土師質土器・黒色土器の小片が出土している。

小溝群 SD 1 と SD 2 の間に、これとほぼ直交する浅い小溝が数条認められる。耕作痕かとも想定されるが、SA 1 と方向を同じくすることから掘立柱建物に伴う雨落ち溝の可能性も考えられる。



第30図 T 8-SB 1 平面図・断面図



第31図 T 8 全体平面図

(9) 補足資料（第32図）

T 6 中央部周辺から、耕土除去中に多量の土師質土器が採集された。これらは、計画排水路からは外れており、耕土・床土において検出されたもののみを採集するに留めた。地点的にはT 6 - SD 1 の南部分に密集する柱穴群の東側にあたり、ほとんどが完形品であることから、掘立柱建物に伴う土器埋設土壙である可能性が考えられる。ここでは、補足資料として掲載することとする。

いずれも土師質土器であり、1~25が小皿、26~32が大皿である。法量はほぼ均一であり、口径9cm前後・器高1.5~2cmとなる。底部は基本的には平底であり、口縁部形態によって3大別される。1~21は、口縁端部に押しナデを加えるものである。したがって端部外面に直立する平坦面を形成しているが、1~12の様に内面にも明瞭な屈曲を持つものと13~21の様に直線的なものに細分される。前者においては、口縁端部を上方へ摘み出し様な形状を呈している。22・23の2点も口縁端部に押しナデを加えるものであるが、これが弱いために内彎するに過ぎないものである。1~21の口縁端部の断面が三角形であるのに対して、丸みを帯びておさめられている。24・25は、口縁端部に僅かながら面を持つが、直線的に口縁部が開くものである。量的には押しナデを加えるものが主であり、その他の形態は1割にも満たない。

26~32の大皿は、口径14~16cm・器高2~3cmであり、口径に若干のばらつきが認められる。成形手法・形態は小皿の1~12に対応し、口縁端部に明瞭な押しナデを加える。32の端部外面には、1条の沈線が認められる。底部内面は1方向のナデによって平滑に仕上げられ、全体的に成形は丁寧である。採集された土器には他器種は含まれておらず、小皿10枚前後に大皿1枚の割合で構成されている。

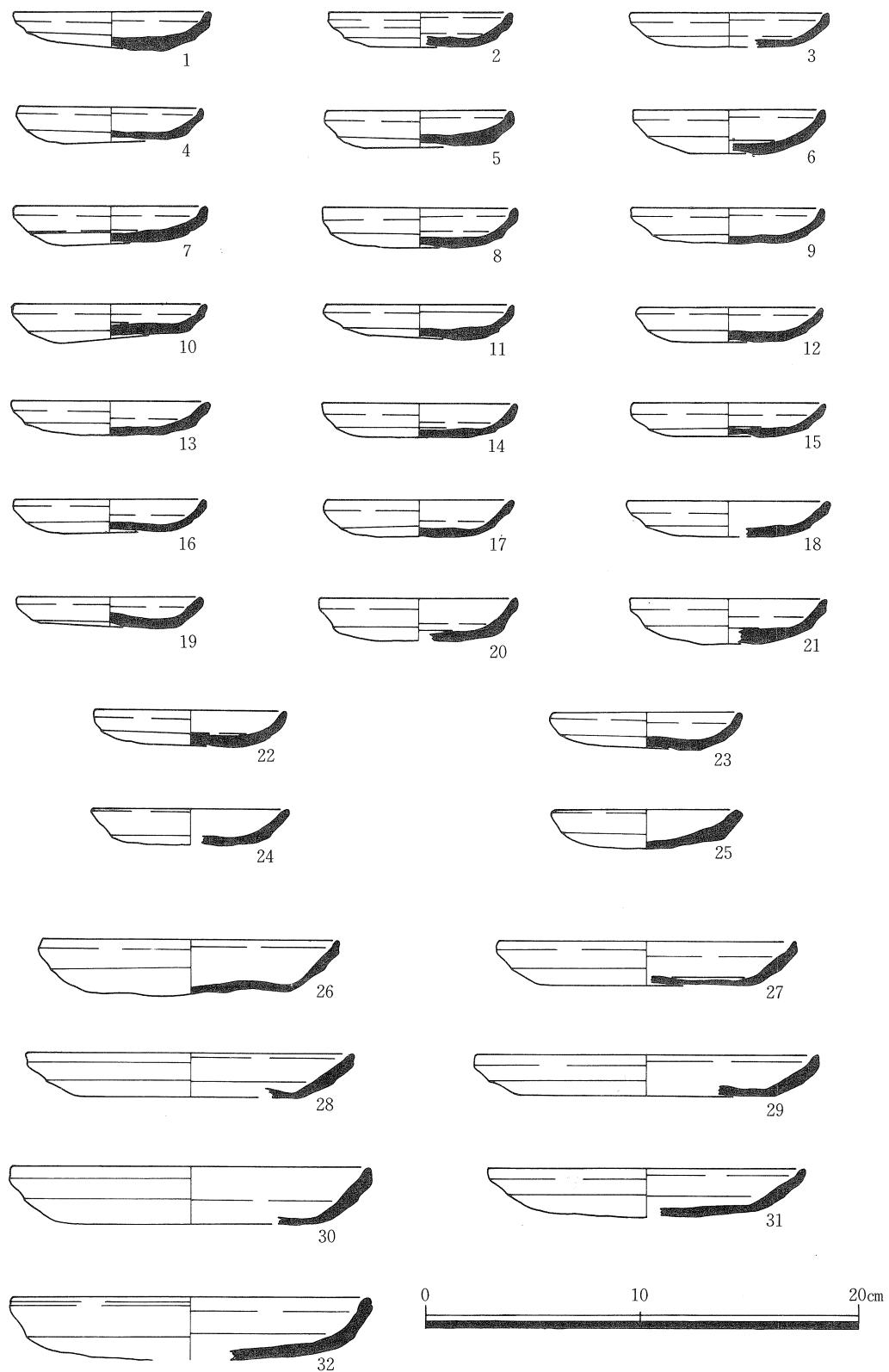
以上の土師質土器皿類は、大小共に基本的に共通する1つの成形手法によるものであり、13世紀初頭期のものである。

第4章 ま　　と　　め

大手前遺跡・金剛寺遺跡の範囲内を調査対象とした今回の調査は、排水路工事に伴うものであるため狭長なトレーニング調査となった。したがって検出された各遺構の性格を明確に把握しきれないと多く残されたが、本章では今後の課題を含みつつ結果を整理しまとめたい。

まず、遺構を年代順に整理し、対象地内の変遷をたどってみることとする。

今回の調査において検出された遺構の中で、最も年代の遡るのはT 6 - SH 1 の竪穴住居である。SH 1 から唯一出土している須恵器杯身（第22図・1）は、口縁部を屈曲させ端部が上方へ摘み出されるものであり、一般的な形態ではない。杯蓋として報告されているものを含めて県内での出土例を見ると、伊香郡余呉町桜内遺跡⁽¹⁾・同郡高月町井口⁽²⁾・柏原遺跡⁽³⁾・長浜市柿田遺跡⁽⁴⁾・八日市市日吉⁽⁵⁾・吉住池遺跡⁽⁶⁾・野洲郡野洲町久野部遺跡⁽⁷⁾・高島郡新旭町堀川遺跡⁽⁸⁾・同町美園遺跡等がある。これらのうち柿田遺跡では竪穴住居で7世紀中葉頃の土器類と、桜内遺跡、井口・柏原遺跡では竪穴住居から7世紀第3四半世紀～第4四半世紀の土器類と共に伴しており、T 6 - SH 1



第32図 補足資料 (T 6周辺採集土器実測図)

についても7世紀後半代の年代を求めることができよう。当該期のものはT6の1棟のみであり、試掘調査によってカマド跡が検出されているものを含めても、極めて散漫であると言えよう。

8～9世紀代の遺構としては、T2-SD2・SD3・SK1とT7-SK3・SK6・SK10があげられるが、やはり稀少である。

ほぼ全域で検出されかつ主体となる時期は、12～13世紀代である。まとまった遺物を出土したのは沼沢地状落ち込みのT7-SX1・SX2であり、人為的に埋め立てられたものと考えられる。出土土器類については、黒色土器は森隆氏編年⁽⁸⁾のII-5段階～III-1段階に、土師質土器は横田洋三氏編年⁽⁹⁾のA₂タイプにそれぞれ相当し、13世紀前半期に比定される。当遺跡周辺では、この頃に沼沢地の埋立てをはじめとする整地が行なわれたものと考えられる。T6-SB1の年代であるが、13世紀以前の遺構が黒褐色土を埋土とし、14世紀後半以降の遺構が灰褐色系土を埋土とすることから、12～13世紀代に求められそうである。当該期の遺構は全域で検出されているわけであるが、中心はT5～T7であり、現在の野田町と1部重複している。

14世紀後半期～15世紀代のT6-SD1・SD2・SD3・SK7・SK8・SK9・SE6等、また近世以降のT6-SE1・SE2・SE3・SE4は、先行する時期の遺構と重複している。

以上の様に12世紀以降を中心として遺跡が営まれているが、最後に周辺の状況含みつつ課題を提起しておきたい。

まず、今回の調査では7世紀後半期の堅穴住居は1棟であったが、8世紀初頭のものを含めても群集せず、極めて散漫な状態にある。このことは次に述べる土地条件にもよるであろうが、若干視野を広げて当時の集落景観を復原する必要があろう。

掘立柱建物・溝の主軸方位を見ると、ほぼN-30度前後-Wであり蒲生郡統一条里と一致している。若干N-10度前後-Wのものがあるが、これらは従前の金剛寺遺跡の調査でも検出されている。これらの建物が存在していた13世紀前半に埋められたT7-SX1・SX2様の沼沢地・自然流路が周辺地域を含めて多く検出されている。これらは湧水帯の下方に位置することから当然であるが、土地利用・開発の変遷をたどる上では重要である。これらは黒褐色土によって一気に埋没した状況を示すものと、暗褐色土によって人為的に埋め立てられたものに大別される。前者は弥生時代～奈良時代前後に自然力を主として埋没した（埋没の過程自体は比較的短期間であると想定される）であろうが、後者については明らかに意図を持った行為によるものである。金剛寺遺跡では室町時代後期に条里水田の再開発が想定されているが、小規模な開発も含めてその時期と開発場所を今後詳細に復原されることが望まれる。

【註】

- (1) 田中勝弘『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書XⅠ－伊香郡余呉町桜内遺跡－』(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1989. 3)
- (2) 田中勝弘『国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－伊香郡高月町井口・柏原遺跡』(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1984. 3)
- (3) 仲川靖『柿田遺跡発掘調査報告書－県道中山東上坂線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1989. 3)
- (4) 丸山竜平ほか『日吉・吉住池遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会・八日市市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1984)
- (5) 大橋信弥・谷口徹『久野部遺跡発掘調査報告書－七ノ坪地区－』(滋賀県教育委員会・野洲町教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1977)
- (6) 丸山竜平ほか『滋賀県文化財調査報告書第5冊高島郡新旭町堀川遺跡調査報告書』(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1975)
- (7) 林博通ほか『美園遺跡発掘調査報告』(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1975)
- (8) 森 隆「滋賀県における古代末・中世土器」(『中近世土器の基礎研究Ⅱ』 日本中世土器研究会 1986. 12)
- (9) 横田洋三「第2章第8節土師器皿の分類と編年観」(『平安京左京四条三坊十三町－長刀鉢町遺跡－ 平安京跡研究調査報告第11輯』(財団法人古代学協会 1984))

T 6・7出土の中近世遺物については、財団法人滋賀県文化財保護協会技師横田洋三・稻垣正宏の両氏から教示を得た。

図 版



1. T1 西半全景（北東から）



2. T1 東半全景（南西から）



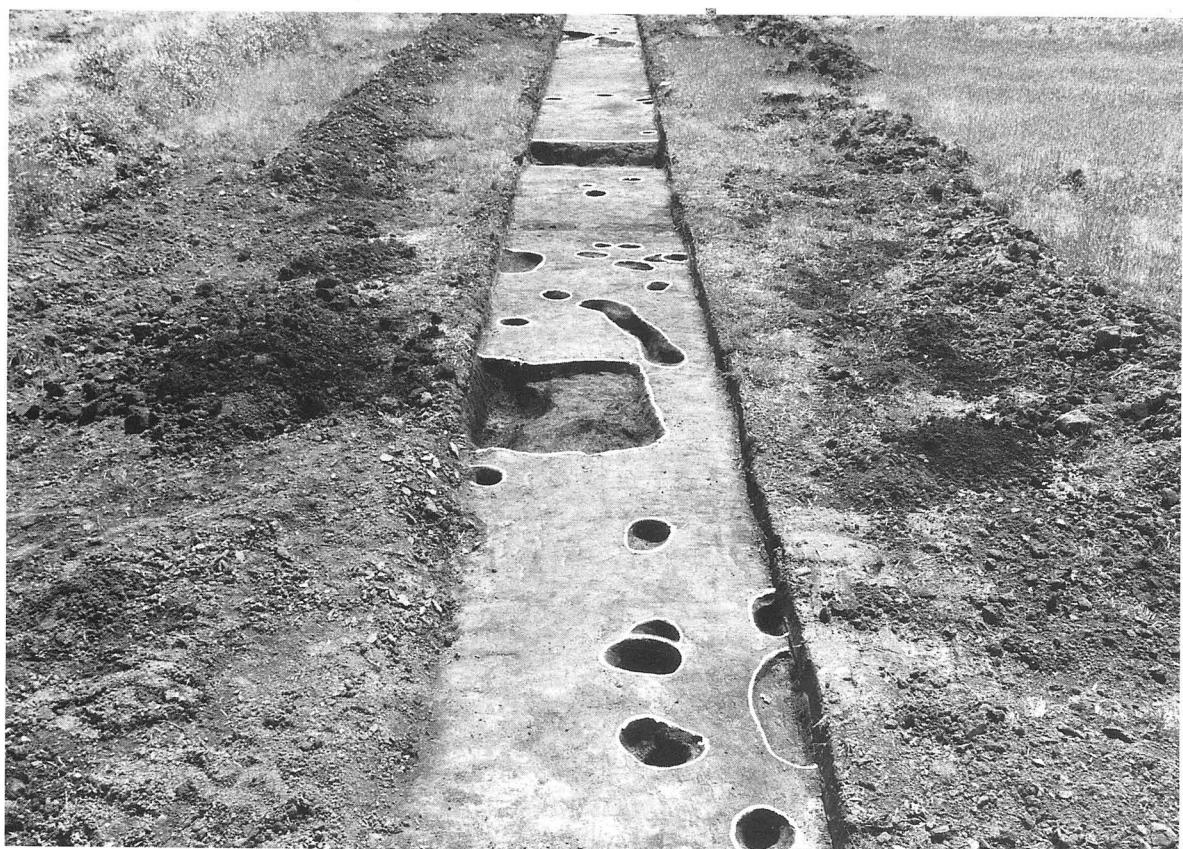
1. T 1 - SB 1 (南西から)



2. T 1 - SD 2 土層堆積状況



1. T 2 全景（南西から）



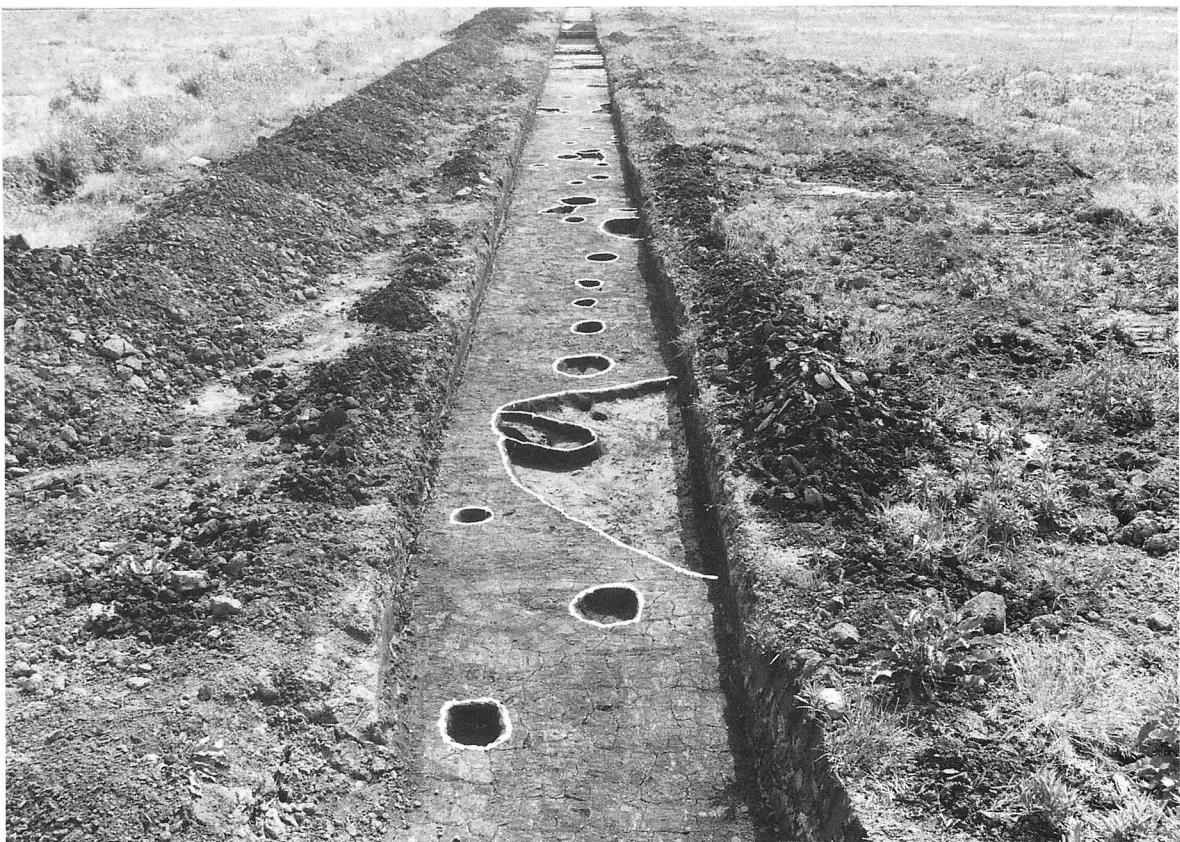
2. T 2 全景（北東から）



1 . T 2 - SD 2 (南東から)



2 . T 2 - SD 3 (南東から)



1. T3 全景（北東から）



2. T3 - SD1 土層堆積状況



1 . T 4 全景 (南西から)



2 . T 4 - SD 1 ・ SD 2 (南東から)



1. T5 全景（西から）



2. T5 東半全景（南西から）



1. T6 全景（南東から）



2. T6 - SD1周辺（南東から）



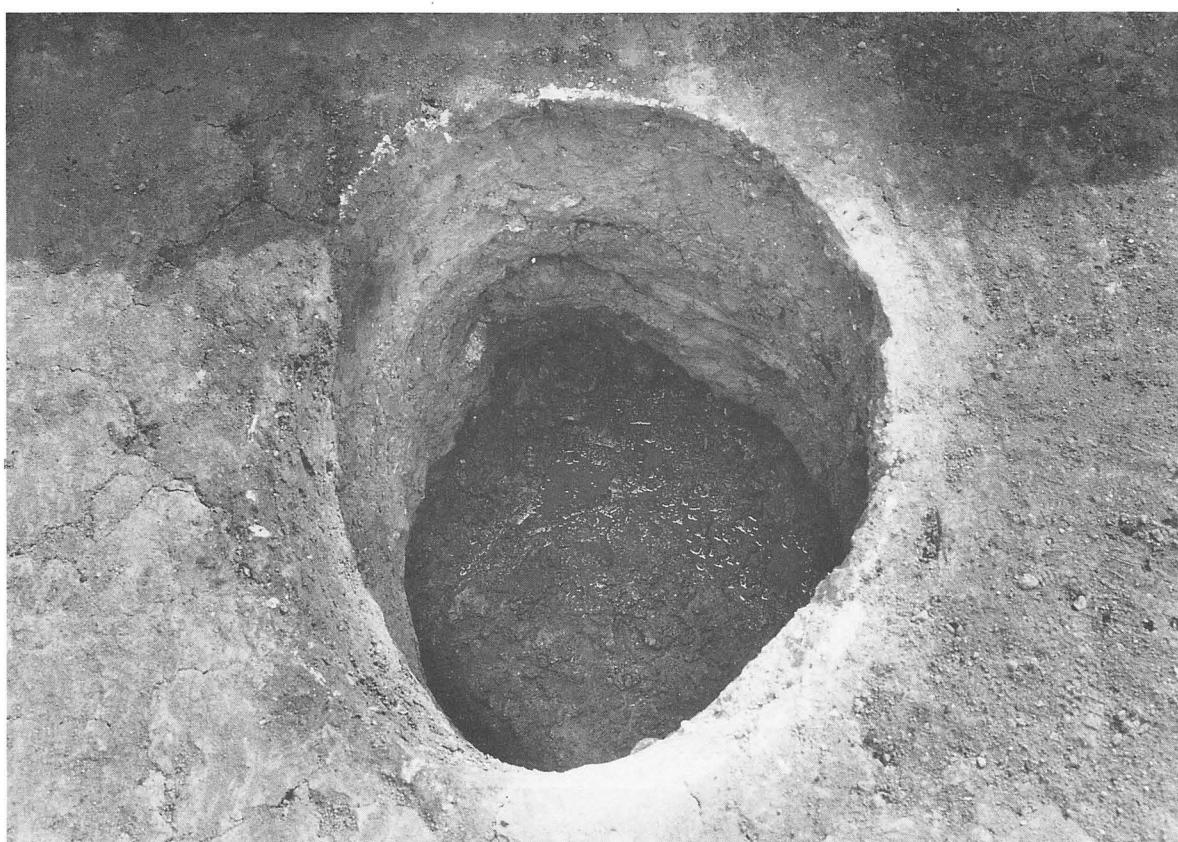
1. T 6 - SK 4・SD 3周辺（南東から）



2. T 6 - SH 1（南から）



1 . T 6 - SB 1 (東から)



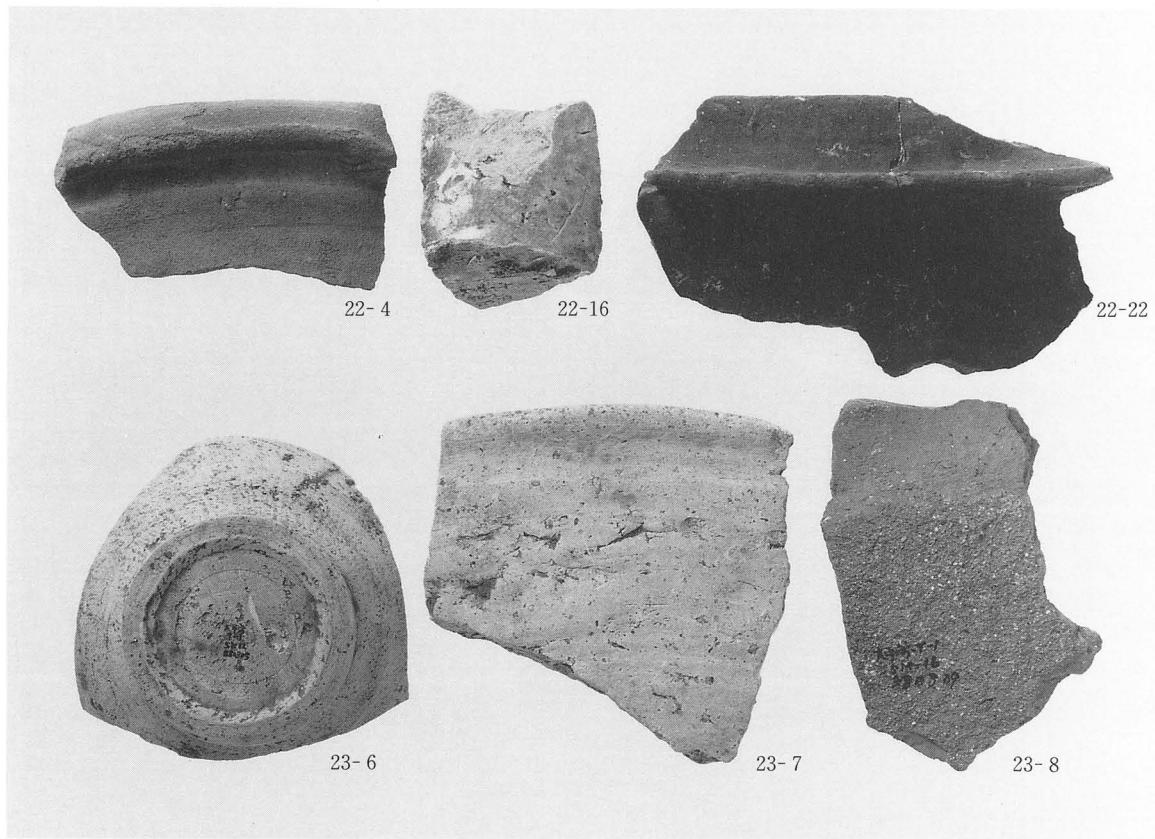
2 . T 6 - SE 5



1. T7 全景 (南西から)



2. T7 - SK3・SK6・SK7 (北東から)

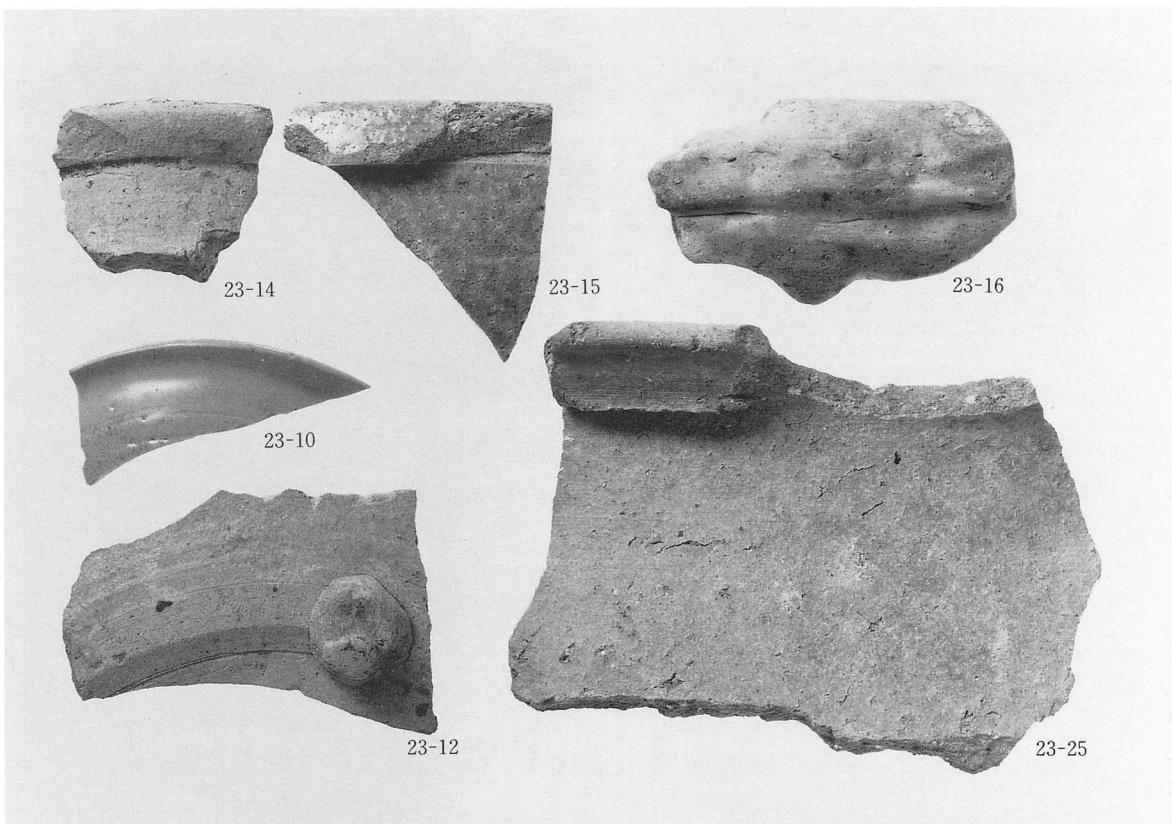


1. T6 出土置物（外面）

(番号は挿図番号に対応する)

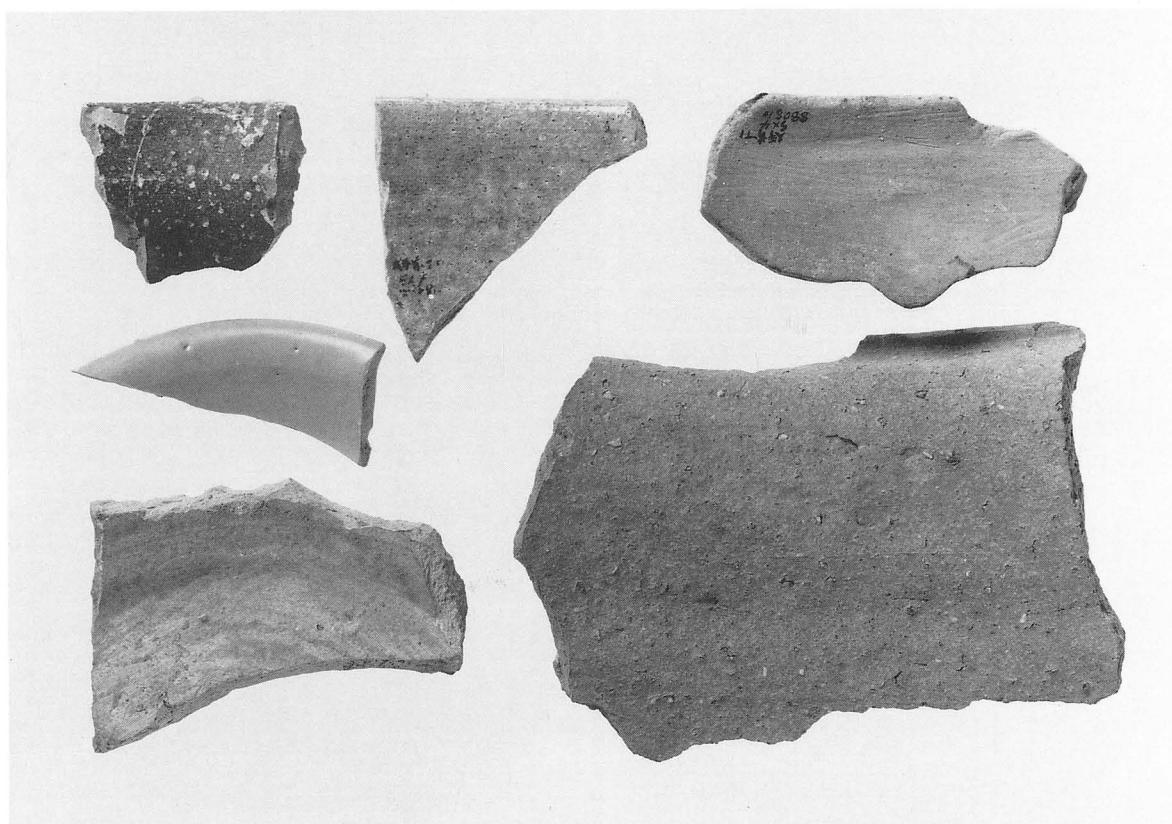


2. 同上（内面）

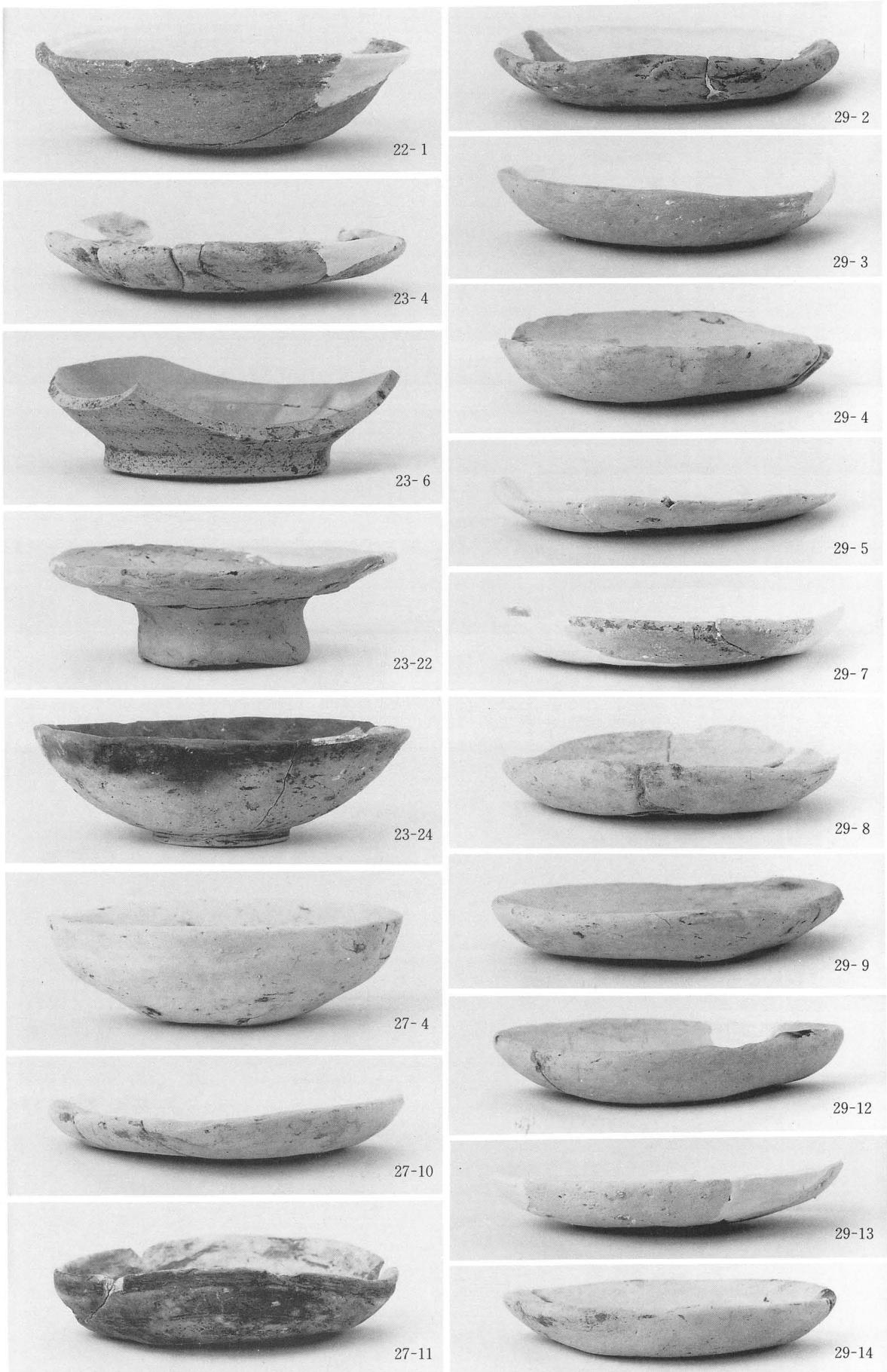


1. T 6 出土置物（外面）

(番号は挿図番号に対応する)

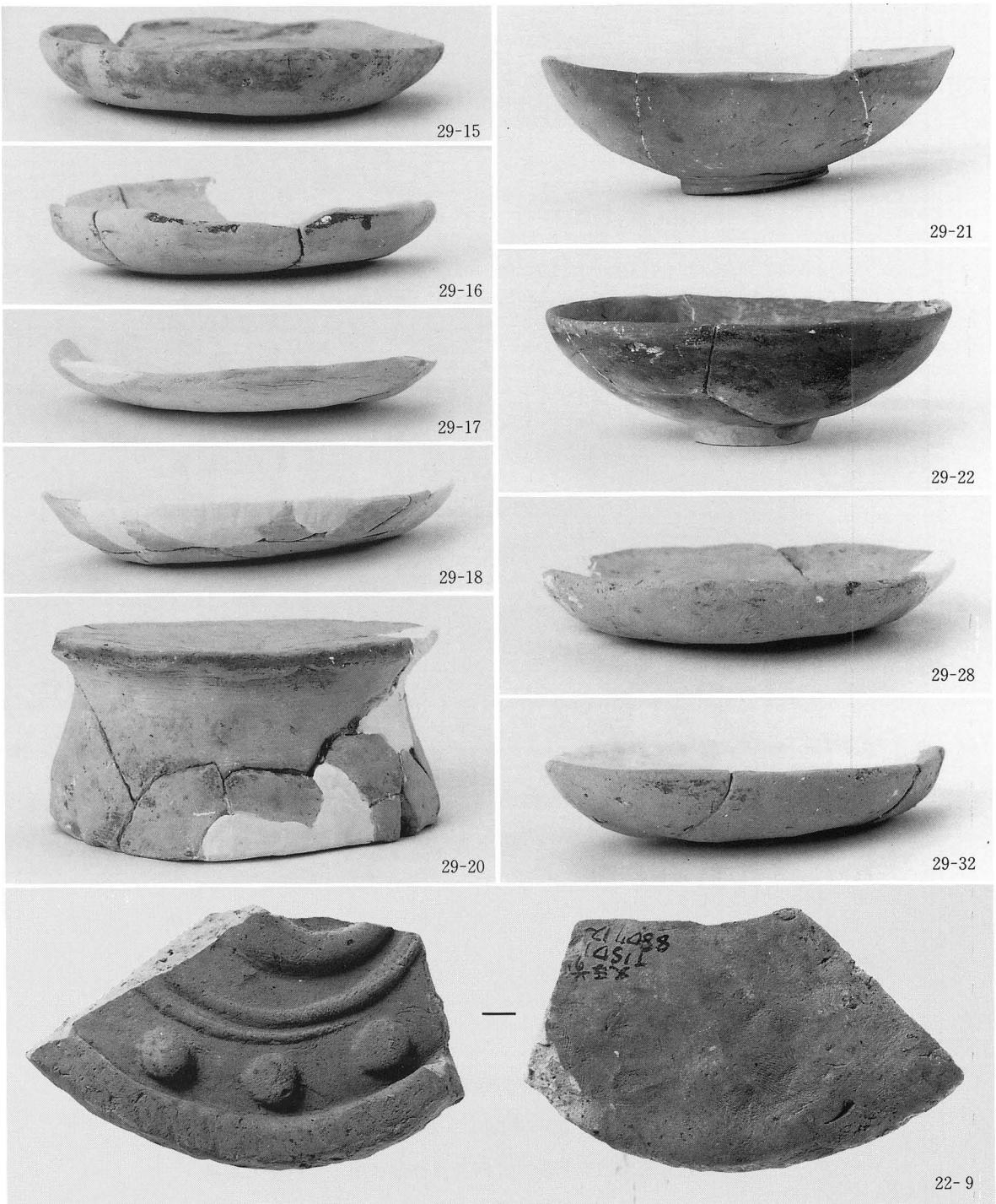


2. 同上（内面）



T 6・T 7 出土置物

(番号は挿図番号に対応する)



T 7 出土置物

(番号は挿図番号に対応する)

平成元年12月

『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』VII-5』

大手前遺跡・金剛寺遺跡

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目 1-1

電話 0775-24-1121内線2536

(財)滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 0775-48-9781

印刷所 大津紙業写真印刷株式会社